



玖乃杜モノクローム

Kunomori Monochrome

MYSCON10 犯人当て企画
玖乃杜モノクローム
《問題編》
by 小田牧央

目次

ルール	四	〔花房視点〕 なくなったの	30
登場人物一覧	四	〔花房視点〕 事件の翌朝	31
問題編	五	〔花房視点〕 あそぼうよ	33
01 / 19	5	〔花房視点〕 保健室に集まる	35
02 / 19	7	〔花房視点〕 僕がやるよ	39
03 / 19	8	スチャからの情報	40
04 / 19	10		
05 / 19	12		
06 / 19	14		
07 / 19	15		
08 / 19	16		
09 / 19	19		
10 / 19	21		
11 / 19	24		
12 / 19	27		
13 / 19	29		

ルール

登場人物一覧

【ルール1 フェアプレイ】

犯人の指摘に必要な手がかりは、すべて問題編に明示します。
ただし、動機の当て推量や、場の雰囲気といった憶測は根拠になりません。

【ルール2 単独犯】

犯人は一人だけです。共犯の可能性はありません。
自発的に犯人をかばって、証拠を隠したり嘘をついた人物もいません。

【ルール3 証言の信頼性】

登場人物は、意味もなく嘘をついたり、言い誤りや勘違いをすることはありません。
ただし、犯人は自分の犯行を隠すために嘘をつくことがあります。また

犯人以外でも、殺人とは別の目的で誰かを騙すことがあります。

【ルール4 地の文の信頼性】

この小説は一人称で語られます。地の文における記述に嘘はありません。
ただし、語り手が誰かに騙され、思い込みをし、結果的に記述が真実と異なることはあります。

図書班関係者

花房律 (はなぶさりつ) 一年C組

寒桜 困夫 (かんざくらいお) 一年C組

寒桜 未緒 (かんざくらみお) 一年A組

湯船 想慈 (ゆぶねそうじ) 一年C組

水影 星子 (みかげほしこ) 二年A組

美術部関係者

姫百合 郷 (ひめゆりこう) 一年B組

甘宮 杏 (あまみやあんず) 二年A組

楠木 亜里砂 (くすのきありさ) 二年D組

教職員

殿村 耕作 (とのむらこうさく) 国語教師、学年主任

宮地 穂香 (みやちほのか) 美術教師、美術部顧問

橘 麗 (たちばなれい) 物理教師、図書班顧問

宇美音 鳴子 (うみねめいこ) 用務員

問題編

01 / 19 「花房視点」 昼寝部へようこそ

朝の通学電車にも慣れてきた四月の下旬。

高校入学から、一ヶ月が経とうとしている。

「ねえ、花ちゃん」

ぶらぶら。吊り輪に両手でぶらさがった困夫が、身体を前後に揺らしている。学ラン姿の高校生だつてのに、小学生みたいなことしてるな。

「部活、どっか入った？」

「んや。短く俺は答えた。」

座っている俺と困夫の膝が、ときどきこつこつする。

「強いて言うなら昼寝部だな」

「そんな部、どっかあったっけ？」

「驚くなよ、俺が創立者だ」

学ランの金ボタンを、意味もなく留めなおしてみせる。制服がブレザーだったら、ネクタイの歪みを直すところだ。しかし、いまだき黒ずくめの詰め襟金ボタンは野暮つたいな、うちの高校。

「いろいろ探したぞ。南棟の三階、空き教室あるの知ってるか？ あそこがベストだ。誰もいないし、陽射しはポカポカ」

「貴重な青春をなにしてんのさ」

こつこつ。ひときわ強く困夫は膝をぶつけた。あきれ顔と笑い顔がミックスシェイクしている。蹴つてやるつかと思つたが、さすがにいまの混み具合じゃ難しい。

「ところで花ちゃん、推理小説って読む？」

「ミステリ研なら、興味ないぞ」

「先読みしすぎ」

「いまの前フリで、他にどういふ流れがあるんだ……というか、玖乃杜にミステリ研なんてあつたか？」

玖乃杜。県立玖乃杜高校。

俺達が、今年の春に入学した学校の名前だ。県下有数の進学校で、毎年数名は難関大学の合格者をだしている。

困夫は、クラスメートだ。たまたま通学電車と同じ車両に乗ることが多く、朝のこういふフツツな会話が習慣になつた。いや、習慣になりつつあるというところか。

フツ。そう、俺も困夫も、普通の高校生に過ぎない。昨日と同じ今日があり、今日と同じ明日がある。そつたな、強いていえば困夫の外見はちよつと目立つか。男にしては珍しく、頭にヘアバンドなんぞしてる。ロン毛にでもしたいのかね。

「ババ日常、ババ意味のない会話。部活探し？ 大いにけつこつじゃないの。きらきらと輝く青春をつかもうぜ。」

「ま、ミステリ研だけはおことわりだけだな。」

「だからさ」

かがみこみ、俺の顔に口元を寄せると、困夫は秘密めかすようにささや

いた。

「無いなら、作ろうかなと思って」

俺は顔をしかめた。

こいつ、貴重な青春をなにしてんだ？

別に、ミステリにこだわんなくてもいいけどな。

駅から学校までの途上、佃夫は他人事のような口調で言った。後ろ手に学生鞆をぶらさげ、肩を波打たせるような歩き方をする。なんか、チャップリンを思いだすな。

「ジャンル限定無しで、読書クラブでもいいし。花ちゃん、小説は読む？」

こいつ、策を変えやがった。枠を広げて攻めてきやがったな。

さて、どう返事するか。ちよっとは読むって答えたら、負けなんだろうなあ。

河原の桜並木を見渡し深呼吸。葉桜も過ぎて、見晴るかす限りの新緑だ。

ああ、爽やかだなあ。他に話題ねえかな。

「そっぴや、佃夫」

「なに？」

目線で二メートルほど先を示す。

通勤通学者の群れに混じって、セーラー服の背中があった。

「あの女子は……なんなんだ？」

「ミーちゃんが、どうかした？」

俺達と同じ車両で、その女子はいつも文庫本を読んでいた。さっぱりした短い髪、シルバーフレームの眼鏡。毎朝のように顔をあわせてるのに、仏頂面以外を見たことがない。

「いや、おまえ、いつもあの子と同じ駅から乗ってくるだろ？ そのくせ、電車のなかでは話さないし。どういふ関係なんだろうなと思ってたんだ」

スカーフは、レモン色。つまり俺達と同じ、今年の新入生だ。となると、兄弟姉妹という可能性は薄い。幼なじみってどこか、と思っていた。

「あれ？ 花ちゃんに話したことなかったっけ？」

学生鞆を振り回し、遠心力を利用して佃夫はクルリと一回転した。

「双子だよ」

「双子？」

隣の顔と、二メートル先の女子を見比べる。確かに、言われてみると似ている、か？

佃夫はなんとというか、コケティッシュな表情がデフォルトだ。チエシヤ猫みたいに、ニヤニヤ笑いが吸いついて離れない。だから、未緒の苦虫噛みつぶしたような表情とくらべると、パツと見は同じに感じない。

だが、こうして注意してみると、確かに似ている。男にしては佃夫は小柄だし、ヘアバンド外して髪をといて、眼鏡をかけさせたら見分けがつかんかもしれん。

「アー、そういうことが。それで謎が解けた。俺はてっきり、幼なじみかなんかだと思ってたんだよ。それがいつだったか、ホームでの女子、鞆でおまえの頭をブン殴ってたことがあったぞ」

あのときは驚いた。ズツパン。そんな小気味いい音が、電車の中にまで響いてきそうだった。

「あの遠慮の無さは、容赦ない肉親って感じだったな」

「アハハ、そんなこともあったね」

ざろん。

変な擬音が聞こえた気がして、視線を前に向けた。しかしそこには、びんと背筋を伸ばして歩くセーラー服の背中があるだけだった。

02 / 19 「花房視点」すちやらかほいほい

着信に気づいたのは、昼休みだった。

学生食堂でカレーライスをほおばりながら、メールを読んだ。さて、どうしたものか。空になった食器を返し、教室に戻ってきた頃には、決心がついていた。

湯船と困夫は、窓際の席にいた。弁当派の二人はいつも一緒に飯を食べている。どうもこいつらの弁当箱のちんまり具合を見ていると不安になるんだが。それで本当に腹がもつのか？

「おかえり〜」

湯船がふにやつと笑った。春の陽射しに顔を蒸されたような表情。

クラスメート、その二。困夫のデフォルト顔がチエシヤ猫なら、湯船のデフォルト顔は日だまりの猫だ。実に気持ちよさそうにスローモーションに話す。俺の昼寝部のホープとして活躍してもらおうよ、いまから勧誘しておくか？

いやいや、こいつは敵だ。困夫と俺は朝の通学電車で話すだけだが、この二人はやけに仲が良く、昼休みも放課後も、いつもべったり雑談している。たぶん、とつくに困夫から熱い青春の勧誘を受けているだろう。いまはず、昼寝部の脅威を排除しておかねばな。

「おつ……ちよつと話があるんだが、いいか？」

「僕？」

お茶のペットボトルを手にした困夫。なにか面白い話？ とでも言いたげな顔をしている。

「部活の話だ。困夫、おまえ 図書班 て知ってるか？」

「図書班？」

手近な席に腰を下ろした。

「読書クラブみたいなもんらしい。物理の橋が顧問だそうだ」

「そんな部、あつたかなあ？」

確かに。入学案内での部活紹介、新入生を勧誘する掲示板的ピラ。どこにも見かけた覚えがない。

三角バツクから牛乳をすすっていた湯船が、ストローから口を離して小首を傾げる。花房君は、誰から聞いたの？

「アー、なんていうんだ、メル友？」

「先輩？ それとも、卒業生？」

「わからん。知ってるのは スチャ って名前だけだ」

授業と授業の間、貴重な十分間の休み時間に、困夫のことをメールで相談した。もちろん、一般的な返事を期待しただけだ。まさか、こんな有益な情報が来るとは思ってたなかった。ウーム、意外に身近な存在だったんだな。

会ったことはない。性別すら知らない。ただ、やりとりの内容から、年が近いのは感じていた。メールを一日に数回送りあつ。ただそれだけの関係だ。内容もありきたりなまでにありきたり。天気、イベント、読んだ本、観た映画。そんな程度だ。

——少なくとも、いまは。

「スチャ。面白い名前だね。すちやすちやすちや。すちやらかのすちや？ それともスチャダラパー？」

「すちやらかほいほいかもな」

湯船は斜め上をみつめながら、牛乳バツクを器用に手のひらの上で回している。パイプをもてあそぶシャーロック・ホームズに少し似ている。とても似てるのは、上の空というところだけだ。深い推理をしてるわけじゃないさそつだな。

「さあな。とにかく、橋に訊けばわかることさ。というわけで困夫、わかっているな？」

「なにが？」

「すでに目的の部があるんなら、ミステリ研はいらないだろ？ 俺を巻き込むなよ？」

ベットボトルに唇をあてたまま、困夫はしばらく黙っていた。珍しく、考え深そうな顔になっている。

「あさ、花ちゃん」

「なんだ」

「もしかして、ミステリ嫌い？」

「……………」

「な。」

どうつ答えたもんか。

「どうでもいいだろ？ じゃ、ちゃんと橋んとこ行けよ」

俺はぶっさらばうに言っつて顔をそむけると、自分の机に戻った。

03 / 19 「姫百合視点」 お墓参り

それを目にしたとき、僕は中学生だった。レオナルド・ダ・ヴィンチが、水の流れを描いた素描。複雑な流れが線だけで表現されていた。

しばらくして、遠足で隣の公園に行った。芝生と雑木林の狭間を、細い流れが通っていた。コンクリートで固められた水路に、僕は美しいものを見つけた。あの素描と出会っていなければ、見落としていたもの。これまでの毎日で何度も目にしながら、ちっとも気づかなかつたもの。

幼い頃から、絵を描くのが好きだった。真つ白な画用紙に覆いかぶさつて、夢中になって手を動かしていた。頭の中にあるものを、なんとかそこに写そうと四苦八苦していた。

けれど違った。本当にすばらしいものは、すぐそこにあるんだ。水の流れ、蝶の羽ばたき、風に揺れる木々のざわめき、暮れてゆく空。うまく言えないけど、いろんなものが大きくて精密な法則に支配されていて、それはどんな細部にだって現れる。

僕は、それをみつけるだけでいいんだ。

「ごちん。」

肘がぶつかつて、壁に立てかけてあったなにかが倒れてきた。おでこのど真ん中にヒット。大人でも乗れそうな、プラスチックの赤いソリ。こゝ、美術準備室のはずなんだけどな。

「いててて……………」

「大丈夫？」

隣から声が出た。心配そうな表情の楠木先輩が立っている。

「ええ、大丈夫ですよ。しかし、なさそつですな」

「ごめんなさい。あると思っただけど……」

いえいえ、いいんです。僕は明るく答えながら、埃っぽくなった学生服を手でたたく。ここは、倉庫だ。といっても美術準備室の隅にある小スペースに過ぎない。天井まで届く棚があり、卒業していった先輩たちの作品や、わけのわからないガラクタが押し込まれている。

「やほほーい！ 亜里砂ちゃん！ 姫ちゃん！ みてみてー！」

声が出た。楠木先輩と、顔を見合わせる。なんだ、そっちにあつたのか。倉庫をでる。解放感に、ホツとした。窓があるだけで全然違う。といつても、ごちゃごちゃなのは変わりない。棚に並ぶ石膏像、壁に立てかけられたイーゼル、いつも宮地先生が木槌で肩を叩きながら紅茶を飲んでいる事務机。

「見て！ こんなみつけた！ きつと外でやると気持ちいいよー！」

左右で髪をゴムバンドで留めた甘宮先輩が、バドミントンのラケットを抱えていた。ムッフィーと自慢げに鼻を鳴らしている。ダメだ、この人、目的を完全に忘れてる。

「あのね、杏……」

楠木先輩が、口元に手をあててクスリと笑った。ポーターが小さく揺れる。私たち、お墓参りに行くのよ？

おソメさんが亡くなったのは二日前、雨の日だった。

といっても、僕のおばあちゃんとかじゃない。亡くなったのは子犬、学校の近くにある河原に居着いていた野良犬だった。

僕ら美術部員は、ときどき餌をやりに来ていた。甘宮先輩によると、それは二日前の放課後、駅に向かう途上で亡骸をみつけたらしい。車にひかれたらしく、一緒だった楠木先輩と二人で河原に埋めてきたそうだ。

美術部員は、三人しかない。ポーターの楠木先輩、元氣ハツラツ甘宮先輩、そして新入部員の僕。顧問で美術教師の宮地先生は、珍しくメイクして「用事があるので帰りますバハハ〜イ」といなくなってしまう。デートでもするんだろうか。

先生がいないので、今日はおおっぴらに課外活動ができる。いや、宮地先生は放任主義だから、あんまり変わらないかもしれない。入部してから一ヶ月近く経つけど、甘宮先輩がなにか描いている姿ってみかけたことがない。(暑いなあ……)

まだ五月にならないけど、まるで初夏を思わせる日差しだ。

遊歩道から河原へ、コンクリートの階段を降りた。夕方なら、散歩中のお年寄りとか、サッカーをする子供たちとか見かけるけれど、いまは閑散としている。

お墓は、橋の下だった。陽当たりが悪いからか、雑草が少なくて、粘土質な土が剥きだしになっている。

美術準備室で探していたのは、かまぼこ板だった。いま、墓標代わりになってるのはアイスクャンディーの棒だ。なるほど、確かに楠木先輩がもう少しましなものにしたかった気持ちもわかる。

なむなむなむ。いまいち本気なのかわからない調子で、しゃがみこんだ甘宮先輩が合掌している。僕も手を合わせ、無言で目を閉じた。短い時間、おソメさんを抱いたときの感触がよみがえった。

白くて、小さな身体。右耳だけ、黒いフチがある。筋肉や血管の感触、ぬくもり、肋骨の手応え。ひとつのいのちが、複雑に組み合わさった数々の部品からできている。ひとつひとつはモノに過ぎないのに、なにかの秘密がこれをそんなふうになっている。

目を開く。そこにはただ、剥きだしの黒い土があった。

隣に目を向けると、楠木先輩が立っていた。少し涙目になって、吐きそうに口元を手で覆っている。気のせいか、顔が青白い。

「よーし、そいじゃ姫ちゃん」

すっくと甘宮先輩が立ち上がった。

「おソメさんの死を悲しんでる感受性豊かで繊細な先輩たちに、紅茶でも買ってきてもらおうかな！」

「わかりました。つまり、一本でいいってことですね？」

「二本！ 二本だよー！」

ハイハイ、わかりました。僕は軽く返事をして駆けだす。確か、遊歩道沿いに自動販売機があったはずだ。

コンクリートの階段を駆け上がりながら、僕は振り返った。遠く橋の下、影の中で、二つのセーラー服が寄り添っている。甘宮先輩が、楠木先輩の背中を撫でているらしい。

僕は、走る速度を少し緩めた。

04 / 19 「花房視点」 幻の図書班

いつもの朝がくる。通学電車に揺られ、車窓の風景を眺める。

(まあ、別に)

友達の定義ってのはなんだか知らんが、俺はハッキリ友達といえるほど困夫と近い関係じゃない。朝の通学電車で、気がついたら会話を交わす仲間になっていた。それだけだ。

(嫌いってわけじゃないんだがな)

ミステリ、ね。思いだしてみると、まだ困夫と会話するようになる前の頃、何度が電車内で本を読んだ。ノベルスをカパー無しで読んでいたこともある。困夫は多分、それをみかけて俺がミステリを読むと知ったんだろう。もしかすると、話しかけてきたのもそれがきっかけだったのかもしれない。

別に、ミステリが嫌いってわけじゃない。ちょっと前は、確かに読むのも嫌だった。受験で読書から遠ざかったのも、むしろ幸いだった。いまはもう、読む分には構わない。

(読む分には、な)

自分の考えを、話すのが嫌なだけだ。

犯人は誰だとか、こんな可能性もあつたんじゃないかとか。そういう、自分の頭の良さをひけらかすような会話。

(……やれやれ)

そして電車はその駅に止まる。おっはよー。ああ、おはよ。

昨日のことなどなにもなかったように、俺達はまた向かい合う。

「で、どうだったんだ？」

「なにが？」

きょとんとした目で困夫が俺を見下ろす。こいつ、いま、絶対わかってて

訊いたな。

「図書部だ」

「ああ、あれね。ウーン……」

「なんだ、理想と違ってたか？」

そもそも、どういう理想があるのか自体、知らんが。

「橋先生、休みだった」

「おやおや」

「季節はずれのインフルエンザだつてさ。今日の六限目も、自習になるかもね」

そういうえば、六限目は物理だつた。第二理科室で実験のはずだつたな。

困夫が、スポーツバッグを反対側の肩にまわした。

「ん？ 今日は何もあつたか？」

「無いよ。それで図書部だけど、まったく進展がなかつたわけでもなくてね」

「橘は休みだつたんだろ？」

「それが職員室、殿村先生がコーヒー飲んでてさ」

殿村は国語教師だ。一年生の学年主任でもある。生徒に厳しく、全校集会などでは喜んで説教役を務める。同じ話を五回くらい繰り返すことで生徒の意識を飛ばすという必殺技を持っている。

「国語の先生だから、なにか知つてるかと思つて訊いてみたわけ。そしたら」

「本当にあつたわけか」

「部長つて人にも会えたよ。面白い人だつた。ね？ 知つてる？」

俺はそのとき、少しだけ視線を逸らした。困夫の右横、二人ほど隣に、その子がいた。昨日の朝、初めて正体を知つた女子。困夫の双子の姉。吊革につかまり、あいかわらずの仏頂面で文庫本を手にしている。全然動かないんだが、いつページをめくつてるんだ？

文庫の表紙には、白いスカーフをしたセーラー服の少女。日本の伝統色と、水彩の色のにじみが効果的なイラストだ。少し距離があるので、タイトルまではわからない。一部分、ひらがなの きんとん という文字だけ読めた。

「玖乃社にはビシヨージョタンデーがいるんだつてね」

困夫の声に、引き戻された。ん？ なんだ？

「びしょ……なんだつて？」

美少女探偵。

黒目がちな瞳に星を輝かせながら、困夫はニンマリ笑つてそう言った。

図書部の部長とやらの話によると。

玖乃社には、校内の揉め事を秘密裏に解決する組織がある。それは生徒による自治組織で、教師でも存在を知らない。数十年の歴史を持ち、卒業生の一部は境界や警察組織に進んだ。おかげで、一般人には極秘の情報をもらつたり、なにかと超法規的に融通をつけてもらえる。

「ほほう、それは面白そうなお話だ。作者は誰だ？」

棒読み口調で俺がそう告げると、困夫はニヤハハと笑つた。

校門を過ぎる。同じような制服の群がそろそろと玄関へ向かう。バカ話にふさわしい、清々しい朝だ。

「図書部つてのは、創作もやるのか？ その妙な設定は、部長さんのネタなのか？」

「かもね。でもさ、ホントにそんな秘密組織あつたら、面白いと思わない？」

「そこまでは認めたとしても、美少女探偵はねえな」

校内問題隠蔽秘密自治組織。

とやらには、よほど頭の切れる女生徒がいるらしい。

生徒の不登校、貴重品の盗難、果ては殺人事件まで、ありとあらゆる事件を切れ味鋭い推理でパッサパッサと解き明かしてきたとか。

まったく、馬鹿馬鹿しい。美少女探偵だど？ 健全な高校生の日常会話にあるまじき不埒な単語だ。実にけしからん。

「本当にそんなヤツがいたら、校内の有名人だな。制服で、学年くらいはわかるだろ」

ツツコミながら、玄関に入る。困夫はフラフラと頭を左右に振った。

「それがねー、白いスカーフをしているから、学年はわからないんだけど」
セーラー服のスカーフは、学年によって違う。今年は、一年生がレモン

色、二年生が水色、三年生が赤だ。白はない。

「だとしても、三年経てば卒業だ。その頭脳明晰な名探偵は、どんだけ留年を続けてるんだ？」

「後輩が継ぐんじゃないの？ いまごろ先代探偵に見込まれた子が、朝練に励んでるかもよ」

「虫眼鏡で足跡を調べる練習でもしてるのかねえ」

フフ、と困夫が笑う。なんだか、みょうになまめかしい笑いだった。

「やっぱり花ちゃん——こういう話、好きなんだね」

俺は、なにも答えなかった。

ていうか、答えられなかった。

「知るか」

詰まった喉をこじあげたのは、そんな捨て鉢な言葉だけだった。困夫のほうを見ないようにして、靴を脱ぐ。下駄箱の蓋を開ける。白い封筒があった。

なんじやらほい。深く考えず、手にとった。普通の事務用っぽい薄手の封筒だ。

納められていたのは、四つ折りの紙だった。味気ないコピー用紙。広げ、紙面に目を落とす。

【挑戦状】

みんなが君を疑っても、私は君を信じるだろう。

だって、本当の犯人は私だから。

盗難にご用心。

しっかりと鍵をかけましょ。

なにそれ。いつの間にか困夫が、隣に立っていた。

05 / 19 「花房視点」六限目の理科

橘は休みだった。ただし、自習にはならなかった。

代理の教師が来て、物理実験はとどこおりなく進められた。俺は幸い——
幸い？ とにかく困夫とは別の班になり、会話の機会は無かった。

話しかけられたのは、授業が終わった後だった。

「花ちゃん、ちよつと頼まれてくれる？」

つつがなく五十分間の授業が終わわり、ひきあげようとしたところで困夫に声をかけられた。

「ん？ どうした？」

身構えながら——ん？ 身構え？ 俺は身構えてなどいない！

「さっき先生に、片づけ頼まれてき。理科準備室の鍵、しめてきてくれる？」

「ああ、了解」

ナンダ。そんなことが。俺はてつきり。

「窓の鍵とかも見てきてよ」

わかつてるって。俺は軽く手をふって、ノートの種類を片手に廊下へでた。

準備室は、理科室の隣にある。

特別教室棟は、建物が古い。別に木造校舎ってほどではないが、廊下の暗さや壁のひび割れが気味悪い。

扉は木製の引き戸だ。上半分にガラスが嵌められているが、磨りガラスなので室内はほんやりとしかわからない。開けるとガラガラと音を立てる。

普段なら橋がここにいるはずだが、今日は休みだ。事務机に、知らない映画女優の写真立てがあった。奥へ進む。窓の手前に背の高い戸棚があるの
で、奥へ進まないと窓を確認できない。フラスコやピーカー、木槌なんかが
転がっている。理科準備室らしい光景だ。

(フム――)

窓はすべて閉まっていた。校庭の東端にあるグラウンドが望めるが、いまは誰もいない。スコアボードは、ここからだと数字が豆粒のようだ。そういえば、困夫は視力が二・五だとか言っていたから、わかるのかもしれない。

(――問題なし、だな)

理科室への扉の鍵が開いていた。ドアノブのつまみを水平にして施錠する。廊下側の扉の脇、フックに南京錠がぶらさがっている。俺はそれを手にとり、廊下へでた。

(しっかし、本当にこんなんでいいのか?)

手にしたそれを、ためつすがめつする。金色の、どこでも市販されてそう
なありきたりの南京錠だ。

どういふ事情かは知らないが、特別教室棟はすべてこれだった。準備室と
理科室との間のように、一部は普通の鍵もある。だが、廊下に面した扉はす
べて南京錠で施錠している。

扉を閉め、金具をかける。輪っかのところに南京錠のU字部分を通し、ガ
チャン。以上、終了。

(――しっかり鍵をけけましよう)

不意に、妙な文句を思いだした。

なんだっけ? ああ、そうだ、挑戦状だ。なんだろな、あれは。

「やあやあやあ、もう済んだ?」

片手を挙げた困夫が、どっかの大統領みたいに悠然とした足どりでやって
きた。その隣、湯船が不思議そうな顔で俺をみつめている。

「花房君、どうして飛び跳ねたの?」

「な、なんでもない! 俺は驚いてなどいないのだ!」

「ゴキブリでもいた?」

それよか花ちゃん。困夫は、たったいま三時のおやつを食べてきましたと
でもいうように、満足げな笑みで俺に訊いた。

「ちゃんと鍵かけた?」

「おうよ」

「窓は閉まってた? 隣の部屋への扉も?」

「ちゃんと見たさ」

「秘密の抜け穴は?」

「あるのか?」

「無いよ。シガニー・ウィーバーは元気だった?」

一瞬、なにを言っているのかと思っただが、すぐにわかった。事務机の、あ
の写真立てか。

「シガニー・ウィーバーは、ソバージュじゃなかったか?」

エイリアンを観たの? と湯船が訊いた。

ソバージュってなに? と困夫が訊いた。

06 / 19 「姫百合視点」 楠木先輩の告白

楠木先輩は、いい先輩だ。初めて会ってから一ヶ月も経ってないけれど、それは間違いない。絵の技法はもちろん、授業や学校生活でわからないことも親身になって教えてくれた。なにより誰かさんと違って、まじめに創作活動している。

強いて言うところ、少しまじめすぎるのかもしれない。考え方が窮屈という意味ではなくて、考えすぎてしまうという意味で。普通ならボンヤリ見過ごしてしまうものでも、細部を観察し、多くのものを読みとる。意識してそうするんじゃないくて、本能的にそうしてしまう。普通の人より受けとる情報が多いから、それを自分の一部にするのに時間がかかる。世界に美しさを見いだせる人は同時に、世界に圧倒されてしまう。

けれど僕は、そんな瞳にあこがれる。この人のように、世界を視てみたい。体調不良らしく、宮地先生は休みだった。放課後、僕は職員室で鍵を借り、美術室と美術準備室を開けた。

職員室に鍵を返して美術室に戻ると、入れ違いで甘宮先輩と楠木先輩が来ていた。僕はイーゼルをとり美術準備室に入った。昨日はできなかったけど、今日はちゃんと活動しよう。

棚のものが目に入った。こども、こちゃこちゃだ。ティーカップにポット、いろいろな種類の紅茶。インスタントコーヒーが切れかかっている。先輩たちも宮地先生も飲んでるところ見たことないのに、誰が飲んでるんだろ。いくらなんでも、学校にトランプやチェス盤が堂々とあるのはまずくないかな。

そんなこちゃこちゃのなかに、葉巻のケースみたいな、プラスチックの平べったい直方体があった。

（これ、いいよなあ）

手にとる。上面のどっばりを引き上げると、レンズが顔を見せる。ポラロイドカメラだ。なんていうか、ギミック感がこごちいい。

（……やば）

後ろのほうに、フィルムの残枚数を示す窓がある。いま、そこはゼロになっっていた。

気配がした。振り向くと、楠木先輩が美術室側の扉から入ってきたところだった。僕が手にしているものを目にする。

「甘宮先輩、またフィルム使っちゃったみたいですね」

苦笑しながらカメラを元の状態に戻し、棚に置く。楠木先輩が、小さくウンと答えた。

「大丈夫かなあ。宮地先生に、謝っておいたほうがよくないですか？」

「そうね……」

ちよつと困ったような顔で、楠木先輩はうつむいている。いやいや、先輩は悩まなくていいですよ。悪いのはもう一人の先輩のほうなんですから。

イーゼルを手にする。楠木先輩は、本棚のほうへ向かった。画集や美術誌のバックナンバーがたくさんある。

「あの、姫百合君」

美術室への扉に手をかけたところで、声をかけられた。

「話しておきたいことがあるの」

「なんですか？」

しばらく、ためらうようにして楠木先輩は唇を強く閉じていた。それから、思い切ったように顔をあげて言った。

おソメさんが死んだのは、私のせいだよ。

雨の日。楠木先輩は甘宮先輩と一緒に駅へ向かった。橋の手前、道路の反対側におソメさんの姿をみつけた。

いつもなら、おソメさんは河原にいて、遊歩道やそれより遠くへはやってこない。それがどういいうわけか、その日は橋の上にまで来ていた。

自分の世界を広げようとして。

道路の向かい側に、いつか餌をくれた人をみつめて。

「私、なにも考えずに……おいで、て」

トラックが、通り過ぎた。小さなモノが、残された。

いのちを失った白い身体が、雨に打たれて横たわっていた。

「ごめんね。私、やっぱり、姫百合君には話さないといけないって。そう

思ってたのに、昨日も言えなくて……」

とつさに返事ができなかった。昨日、沈うつな表情をしていた楠木先輩を

思い出した。そうか、あれはそういう意味だったのか。

「いや、そんなの気にしなくていいですよ。僕はどうでも。ていつか、お

ソメさんが死んでしまったのも、事故でしょう？先輩はなにも悪くないで

すよ」

同じようなことは、きっと甘宮先輩も言っているだろう。僕より百倍元気

な調子で。

それでも、たとえ百分の一でもいいから、この人を元気づけたい。僕には

わかる。この人はきつと、考えすぎてしまう人だ。

「うん……そうだといけれど」

「もちろん、そうですよ。おソメさんが死んじゃったのは悲しいですけど、

どうにもめぐりあわせの悪いことってあるじゃないですか」

この世界が美しい法則に満たされているなら。

ただの、運の悪い巡り合わせなんて、あるんだろうか。

「ごめんね、暗い話しちゃって。その……」

なにかまだ言いたげに、楠木先輩は視線をさまよわせた。やがて軽くつつむくと、動かなくなった。

「ほら、暗い顔していると、僕が怒られますから。甘宮先輩がここにいたら、

僕は今ごろ裸踊りでもしろって命じられてますよ」

楠木先輩が、きよんとした表情になった。そして、少しだけ微笑んだ。

うん、確かに、冗談じゃなく甘宮先輩はそう言うだろうなあ。

07 / 19 「花房視点」部活動ではありません

チャイムの音が聞こえた、気がした。

錯覚かもしれない。目が覚めた俺は、顔を起こした。

放課後だった。理科準備室を施錠したあと教室へ戻り、ホームルームを終

えた。俺は困夫に声をかけられる前に、ダッシュで教室を飛びだすと南棟の

三階へ来ていた。なんのため？寝るためだ。俺は！俺の昼寝部を死守す

るぞ！

(ん——)

窓が開いている。一人の女生徒が、外を眺めていた。

腰までとどく黒髪が、外から吹きこむ微風に揺れている。ちよっと、美人

だ。横顔だけじゃよくわからんが、古い日本映画にでてくる女優みたいな

清楚で落ち着きのある感じの人。

水色のスカート。二年生だ。

（——誰だ？）

口の字型に組んだ長机、右腕を枕に、さて、どれだけ眠ったことや。長机に置いていた携帯電話を手にとる。午後四時一分。

携帯電話を内ポケットに戻す。なぜポケットから出していたのかというと、寝るとき胸の辺りが机の角にあたって、つぶれる可能性があったからだ。

「おはよう」

窓際の上級生が振り返る。逆光で、顔が判別しがたい。肩に緩やかな巻き髪が垂れている。アールヌーボー調の優雅な描線のように。

「花房君？」

「そっだが」

「二年A組の水影です」

窓際を離れ、ゆっくりした足取りで歩く。手近な椅子を引き寄せ、座った。「図書班の、班長をしているの」

……来やがった。

そついうことか。困夫を経由して、俺が放課後はここで昼寝部をしていると知ったのだから。

「なにか用ですか」

「目的は勧誘。でも、勧誘はしません」

「なんのこっちゃ。」

水影、と名乗った人物は、軽く足首を組んでいる。膝の上で軽く両手を重ね、薄く微笑んでいる。

「はて、おかしいな。」

目の前にあるのは、近所の気になるお姉さんタイプな上級生の、優しい微笑みのはずなんだが——みよつに、不穏だ。

「なぜなら、図書班は 班 であり、部 ではないからです」

俺は口を開きかけ、そして閉じた。そういえば、確かスチャのメールにも、図書部ではなく 図書班 とあった。

「正式な名称は図書環境整備班。部活動ではありません。だから、勧誘は認められてないの。入学案内には載らないし、ピラを貼るといった活動もできません」

「アー、待ってくれ。話についていけない。そもそも部と班で、なにが違うんです？」

「音もなく、水影は立ち上がった。」

「少し歩きませんか？ 見せたいものがあります」

こいつ、やばい。

なんとなく、やばい。

話の運び方がつますぎる。いきなりわけのわからんことを言い、すかさずそれを説明し、そして今度は俺を立たせ、歩かせ、後戻りできないほど話に関わらせようとしている。ここはひとつ、デタラメな言い訳して逃げ帰ったほうがいいな。

と、結論したときには、俺は学生鞆をぶらさげ、水影とともに廊下へでてしまっていた。

08 / 19 「花房視点」第二図書室

南棟の階段を下りかけたときだった。水影が急に、足をとめた。

踊り場の窓から、特別教室棟が見える。俺も、水影と同じ方向に目をやった。

「田夫君と湯船君ね」

そのようだ。あそこは、三階の廊下だ。

あの背中は、殿村か？ 距離がある上に、窓越しなのでわかりにくい。もう一人、誰か女子がいるようだが……。

水影はあまり気にならないのか、さっさと階段を下りていく。俺は、後を追った。いったん一階へ降り、渡り廊下のほうへ。やがて特別教室棟に入った。

高校生活には慣れたか、授業にはついていけそうか。そんな、いかにも上級生と下級生らしい、当たり障りのない会話を続けた。

「そういうえば、こんな言葉は知ってる？ 玖乃杜モノクローム という言葉」

一瞬だけ、水影が振り返る。唇から白い歯がわずかに覗いた。

「いや、初耳です。語呂のいい単語ですね」

そうね。長い髪を払いながら、水影は小さくうつなずいた。

「意味はあまりよくないけれど」

「どういう意味なんです？」

「モノクロって、色が無いでしょう？ 灰色。灰色の学校生活」

ああ、なるほどね。

玖乃杜は、県下有数の進学校だ。野暮つたい学ランと古くさいセーラー服は、上の世代の大人達ほど信頼の目で見つめてくる。同時にそれは、他の学校の生徒にとつては揶揄の対象でもある。

あんなとこに入っても、面白いことなんてなにもない。そういう意味なんだろう。

「最近ほ、もう言わないのかもね」

「そうですね」

——寝てるだけのあなたに、ぴったりの言葉ね。

黒髪の後頭部から、そんな声が聞こえた気がした。

階段を上がる前に、なんとなく理科準備室のほうへ視線を走らせた。扉には、南京錠がかかっている。六限目の後、田夫君に頼まれ施錠したときのみまだ。

二階へ。第二図書室というプレートがあった。ほう、こんな部屋があったのか。

「まだ……戻ってきてないのね」

先に入った水影が、室内を見渡していた。多分、さっき三階にみかけた田夫と湯船のことだろう。

図書室といえは、確かに図書室だった。カウンターがあり、詰めれば六人は座れそうな机があり、天井までとどきそうな書架がある。

しかし机は二つしかなく、誰もいなかった。普通なら進学校らしく、勉強に励む学生がいるもんだが。

代わりに、ほとんどが書架だった。奥行きからすると、床面積の三分の二はあるだろう。

「やつほー！」

ガラッと扉の開く音がした。振り向くと、入り口に見知らぬ女子が立っていた。

祖父母に全力でサヨナラをする孫のように、思いつきり片手をあげて左右に振っている。

「やつほー、甘宮さん」

静かな口調で水影が応じた。

「あのね、星子ちゃん、二つ伝言」

見知らぬ女子はこちらへVサインをEシツとつきつけ、それから手でメガホンを作った。

「殿村先生がね、廊下でバドミントンするなって」

「それはもつともね。でも、私はした覚えはないけど？」

「ちつち、話を急いじゃいけないぜお嬢さん」

甘宮は片方の瞳を閉じ、唇の端をぐぐいとあげた。一本指を立て、ワイパーのように振る。

「おたくんとこの新入部員二人も、現行犯お説教だったんだぜい！」

たぶん、困夫と湯船のことだろう。そうか、南棟から見えたのは、そういう光景だったのか。なにやってんだ、あいつら。

「まあ、誘ったのは私だったんだけどね！ ねえ、そつちでわかりやすく呆れ顔してるの新入部員？」

「どうかなあ？ 花房君、どう？」

バドミントン部に入るつもりなら、ありません。わかりやすい呆れ顔で俺は言った。

「甘宮さん、ちよつと話を整理させて。ここにいた困夫君と湯船君をあなたに誘って、上でバドミントンをしていたのね？」

「うん。殿村にみつかないように三階でやってたけど、羽根が階段のほうへ落っこちてさ。それ取りにいったタイミングどんびゃしゃりで殿村来たの。予知能力者みたいで笑つちやうね」

あはははは。本当に笑いだした。気持ちのいい朗らかな声をしている。ウーム、ちよつとバカっぽい人だが、憎めない人だ。

「エスパー殿村ね。二人はどこへ？」

「さあ？ トイレかな？ 私は美術部でお昼寝活動してくるよ！ 陽射しボカボカだしね！ どうせだから新しい部にしちゃおっか！ 私、昼寝部の創設者として後世に名を残すよ！ あれ？ その新入生、どつして頭を抱えてつづくまってるの？」

ちよつと気分が悪くなりましてね。ええ、ハイ、気にしないでください。

「そんじゃね、バイビー！」

「甘宮さん、もうひとつの伝言は？」

扉を閉めかけた甘宮が、ポカリと自分の頭を拳固で叩き、小さく舌をだした。確信はないが、三次元でこんなしぐさをナチュラルにする人を、俺は生まれて初めて見たように思う。

「んーとね、とどがつまるよね。なに！ トドが詰まる！ これは珍事件だ！」

「とどがつまり」

「騒ぎを起こすなってさー！」

「あら」

水影は、長い黒髪を後ろに払った。薄く笑みを浮かべている。

「それは難しいわね」

「むずかしいわね！ にひひひひ！」

「にひひひひ」

ほんじゃバイビー！ にぎやかな上級生は、今度こそ扉を開けて姿を消した。

今の人も、図書班の？ 俺が訊ねると、水影は小さく首を左右に振った。「美術部員。この上がね、美術室なの。クラスが同じだから、ちよつと知り合いなだけ。ぜひと欲しい逸材だけど……」

こつという偏見はよくないが。

読書をする人には見えなかったぞ。

「さて、と」

しきりなおすように、水影は小さく手を打った。

「それでは、本題に入りましょうか」

カウンターの奥、窓際にある扉へ、水影は歩いていく。図書準備室への扉だ。

09 / 19 「花房視点」 図書班の歴史

図書準備室は、狭い部屋だった。いや、床は広いのかもしれないが、物が多すぎる。

壁を埋める書架、机といわず床といわず積まれた本、部屋の真ん中に鎮座する作業机。

セロハンテープ、押し切り、でかいホチキス、万力、木槌。あれはなんていうのか、パンチ穴を開ける器具。散らばってる文具や工具類の名前をあげていくだけで日が暮れそうだ。

「隣の部屋は、なんですか？ 図書室なら、北棟にもあるってのに」

玖乃杜高校はここ数年、棟を増築している。特別教室棟という名前にはなっているが、一部の特別教室は北棟へ移動している。この棟は、数年後にはお役ご免で取り壊しになる計画らしい。

「一言でいうと、書庫ね」

「書庫？」

ほん、とデスクトップパソコンのモニタを水影は軽く叩いた。周囲のものはほとんど埃をかぶっているが、その液晶ディスプレイだけは真新しい。

「広さが足りなくて、図書室には置けなくなったものを置いているの。貸出頻度の低い本、貴重な本、購入したばかりでラベルやブックカバーの貼ってない本、購入はしたけれど内容が高校生に不適切だと判明した本。いろいろよ」

「閉架ってことか」

「そういうこと。図書室の端末でも、このパソコンからでも、蔵書検索ができます。校内のLANにつながってるの。置き場所が 第二 になっている本は、隣の部屋にあるわ」

チャイムが鳴った。

普通は六時限目で授業終了だが、補修を受ける者のために七時限目と八時限目もある。そのため、放課後でもときどきチャイムが鳴る。

水影は窓際へ足を進めた。普通のカーテンだけではなく、暗幕もある。カーテンと暗幕をたぐりあげると、膝下までくらの高さのロツカーがあった。南京錠があった。といっても、いまは解錠された状態だ。

「期待しないでね。大したものが入ってるわけじゃないから」

「鍵をかけているのに？」

「昨日まではかけてなかったわ。今日、田夫君が持ってきてくれたの。物置に似たようなのが二、三個余っていたらしくて」

「学校のと、ほとんど変わらんね」

「見分けがつかないわね。いちばん安いタイプなのかも」

扉を開く。上下に棚が分かれていた。

上の段はほとんど空だ。下の段に、本があった。卒業文集のような、装丁が簡素で薄い本だ。

「フフ……隣が閉架書庫なら、これは玖乃杜の禁書図書館かな……私の話を聞きながら、適当にめくってみてくれる？」

渡された本は、ところどころ変色していた。ずいぶん古そうだ。

表紙には 玖乃杜暗黒史 とあった。

編集後記や奥付によると、この本は二十年以上前、今はなき新聞部が秘密裏に作ったものらしい。校内七不思議だの、生徒会副会長のカンニング事件だの、真偽不明かつ憶測たっぷりな記事が入り乱れていた。

そのなかのひとつとして 文学部内紛事件 と題された記事があった。

文学部は、いまもある。それどころか、玖乃杜高校の文学部は、全国的に名の知られた存在だ。年に二回でる会誌を読めば、すぐにわかる。平安時代の古文で書いた小説だの、東南アジアでの無一文旅行記だの、高校生レベルを超えた小説が並んでいる。

その文学部で、二十年以上前に内紛があったという。

「私の話だけだと、信じられなかったでしょう？」

水影が、微笑んでいる。

「……まあね」

俺は 暗黒史 をバラバラめくっていた。

当時の新聞部は、これを冗談で作ったのかももしれない。ゴシップ記事満載の女性週刊誌やスポーツ新聞のノリで作ったのだろう。

だが、まったく根も葉もない創作とは思えない。少なくとも、水影が俺をだますためにこんなものを作った可能性はゼロだ。あまりに手が込みすぎている。

記事の内容はこうだった。二十年前、文学部の会誌にSF作品が登場した。それが原因で内部分裂が起きた。純文学でもSF的な趣向をとり入れた

作品があるとは聞く。だから、別に初めからSFが問題視されていたわけではないらしい。

文芸部では、合評会で作品を部員間で批評する。あるとき、SF設定の作品を巡って意見が真っ二つに別れた。どう考えても、科学的におかしい描写がある。その批判に対し書き手は、SF設定はあくまで文学的表現の手段に過ぎないと反論した。

これをきっかけに、文学部内で派閥ができていった。文学を優先する一派と、厳密な科学的考察をすべきと考える一派だ。紆余曲折の末、少数派だった後者は文芸部を集団で退部した。SF研究会を組織し、独自の会誌を作るようになった。

だが、SF研究会には問題があった。同好会を新しく作るには、顧問の教師が必要だ。しかし、文芸部の内部分裂という経緯を知っていた他の職員は、誰も顧問になろうとしなかった。しかたなく、SF研究会は非公認の集まりになった。予算も部室も無く、それでも数年は継続したらしい。

だが、文学部との因縁が災いした。保守的な文学部と対立するかのようになり、SF研は前衛的であろうとした。都内での、同人誌の頒布イベントに参加したらしい。それが健全な高校生らしくないという理由で、SF研はついに強制解散となった。

助け船をだしたのが、当時の物理教師だった。その男性教師はSF研のメンバーに入れ知恵し、図書環境整備班を組織させた。

「本来、班とは」水影は説明した。

「委員の低位組織です。委員の人手が足りないとき、教師が他の生徒を臨時に集め、手伝いをさせることができる、というものだったの。けれど文学部の内紛より更に前、その制度に生徒から批判が集まりました。教師が私たち

を手足のように働かせるとは何事か。生徒は勉強が本分であり、自主的な活動ならともかく、命令をきく義務はない——そんな感じだったみたいね」

「学生運動みたいなものか」

「恐らくね。とにかく、生徒手帳の記述は変わりました。班は自律的、自主的な活動の場であり、教師はそれに意見を提案するだけ。物理教師はこの制度を利用して、SF研を救済したの」

「てことはなんだ。けつきよく図書班ってのはなにするんです？ この図書室で埃にまみれて蔵書整理か？ それともSF小説を書かにならんのか？」

「名前って、こわいわね」

斜めに射しこむ陽射しは、水影の膝までしか届かない。

「自分達なりの志を抱いてSF研の人達は頑張ったでしょう。でも、学校という場所は、次々と人が入れ替わっていきます。図書班という集団が組織された経緯を知っている人は、教職員でもほとんどいない……」

なぜか、殿村の顔を思いだした。

あいつは、この学校で教師を何年やっている？

「設立当初の図書班は、教職員からも一部の生徒からも冷遇を受けたみたいね。勧誘行為をしてはいけないという決まりも、そのひとつ。でも、正直なところ詳しいことはなにもわからないの」

「なぜですか？」

「記録が無いから。この 暗黒史 も、無理を言って先輩に譲ってもらったものなの。そのひとはいま、海外にいるわ」

静かに、水影は微笑んでいる。さつき感じた不穏さが、なぜかこの埃臭い部屋では、きれいに消えていた。

「自主的な活動、それがすべてです。部屋、書架、パソコン、ロッカー。表

向きに明かせる資源はすべて見せました。後は、あなたの判断です」

表向きには明かせない資源があるような口振りだな。

「好きなことをしろ、と？」

「それは語弊があるかな。図書環境整備班という名称がある以上、あまりそこから離れたことはできません。公序良俗、学生の身分もお忘れなく。一部の先生達からは、理不尽な制約を受けることもあります。有限の設備、有限の時間、ある程度の不自由。その上で、あなたがしたいことを、できるかぎりしてください」

「……………」

「さつきも言ったけど、私はあなたを勧誘できない。私にできるのは紹介まで。ここからは、花房君の判断次第」

「班であって、部じゃないから、だな」

そゆこと。水影が軽く答えた。

10 / 19 「花房視点」 白いスカーフ

かすかだったが、歓声が聞こえた気がした。振り返る。

体育館越しに、グラウンドがあった。野球部が試合をしているらしい。この時期からすると、新入部員を交えた紅白戦ってところか。

「あんなところにいたのね」

水影も、窓のほうを向いていた。なんのことかと思ったが、すぐにわかった。グラウンド脇、場違いな学生服姿が二人いた。遠くでみわけがたいが、囲夫と湯船だろう。

試合のほうは、誰かがヒットを打ったようだ。点数はどうだろう。

スコアボードを確認しようとしたが、見えなかった。並木の茂みに隠れている。枝が高い位置にあるので一階の理科準備室からは見えたが、ここからは無理だ。

校庭の手前には体育館がある。ここより西の教室からも、スコアは体育館に隠れて見えないだろう。というか、特別教室棟そのものが東端にあるから、校舎内でスコアが見えるのは理科準備室だけだったんだな。

「これで、私の話は終わり」

でまじょうか。水影が俺のほうに目で合図した。図書室のほうへ行こうとして、足をとめた。

「これ、どうします？」

暗黒史を掲げる。

「おっと」と、くると水影が振り返る。

「忘れちゃダメね。戻しといてくれる？ ついでに鍵もしめちゃって。あ、そうそう」

水影が財布をとりだした。黒猫のキーホルダーがついた鍵を、俺に渡した。

「私、明日はちょっと用事があるから、すぐには図書室に来れないの。ロッカーの鍵、預かってくれる？」

「はあ、わかりました」

まだ入部、いや、入班すると決めただけじゃないんだがな。腰を落とす。ロッカーに暗黒史を戻し、扉を閉めかける。

ふっと、白いものが目についた。

上の段の奥、なにかある。小さく畳んだ、ハンカチのようなもの。

(白い……スカーフ)

美少女探偵。

(——ひょっとして)

学年のわからないスカーフをして、幾多の難事件を解決してきた名探偵。あの白いの、スカーフか？ だとすると？

待て、落ち着け。状況を把握しろ。

(このなかに、伝説の真偽を確かめる材料が眠ってるってのか？ 俺はいま、この玖乃杜高校に秘された秘密組織の謎を解き明かせる立場にあるってのか——？)

……激しくどうでもいい。

ボタン。扉を閉めると、思いっきり強く南京錠で施錠した。

図書準備室をでると、水影が誰かと話していた。

「あ……」

セーラー服が、こっちを向く。小さく口を開いた。

「こちら、寒桜未緒さん。知ってる？」

水影が俺に紹介する。まあ、知ってはいた。

「未緒さん、先生の用事は済んだの？」

「はい、済みました……」

眼鏡をかけたその女子は、小さくうなずいた。ミーちゃん、困夫の双子の姉だ。

仏頂面、ではなかった。不安そうな瞳で、おどおどしている。いまだき男子と会話することにとまどう女子などいるはずもないが、目の前にいるのは少数の例外なんだろうか。

考えてみると、声を聞くのは初めてだ。男と女なんだから当たり前だが、さすがに声はぜんぜん違う。

などと思っていると、急に末緒は逃げるように身を翻した。書架の森へと、後ろ姿が消えていく。

「ロツカー、ちゃんと施錠した？」

呼びかけられ、俺は水影のほうを向いた。

「しましたよ」

なんか、同じようなやりとりを少し前にもしたよつな……。

「この後、なにか用事は？」

さて、どうするか。もっかい寝ますとはいいいにくい。

「特になにも」

「なら、田夫君と湯船君が戻ったら、新入生同士で自己紹介。ついでに、最近読んで面白かった本についてトークでもしてもらおうかな」

今更、田夫と湯船に自己紹介してもな。

ん？ 違うか、もう一人いたな。いま、本棚の迷路にいる女子。

「了解」

「では」

これで話は終わったらしい。水影は、廊下側のほうの机に着いた。机の上には鞆があり、教科書やノートをとりだした。勉強をするつもりらしい。

俺も、宿題を片づけるか。窓際の机の椅子に座りながら、携帯電話の時刻表示を確かめる。ちょうど午後四時半だった。

宿題を始めてから数分後、俺は、自分が馬鹿なのに気づいた。スコアを確認したければ、簡単な方法があるじゃないか。

内ポケットから携帯電話をとりだす。通話履歴から、目的の番号を選んだ。

「はいっ？」

「あ、田夫か？ 俺だ、花房」

「え？ あ、花ちゃん？」

トランペットだろうか。受話器越しに、校歌のメロディが聞こえた。紅白戦で応援演奏って、どっちの応援をするんだ？

「やられたよ。いま、第二図書室だ。わかるか？」

椅子から立ちあがり、窓のほうを向く。大きく手を振ってみせる。

小さくてみつけづらかったのだろう。かなり遅れて、グラウンド脇にいる学生服姿が手を振り返した。湯船らしき姿もあわせて手を振る。

「あ、そうか。部長さんと会ったんだね？」

「正しくは、班長さんだな。図書班の紹介を受けたとこだ」
手を振り続けるのも疲れるので、窓から離れ机に戻った。

「どう？ 面白そうと思わない？」

いまにもクスクスと笑いだしそうなくらい、田夫の声が明るい。

「んー、まあ、どうすつかな。そつちでやってるのはなんだ。紅白戦か」

「うん、そう！ 新入チーム対、上級生チーム」

「なら、上級生チームのほうが勝ちそうなんだな。得点はどうだ？」

「え？ あ、うん、エート、ちよつと待って……」

少し間があった。スコアを見れば、すぐわかるだろうに。

「スコアはね……三対二、上級生チームが勝ってるね。でも、新入部員チームのほうに主力メンバー入れて、調整してるから」

「そうか……話は変わるが、水影先輩、おまえら戻ってきたら、新入生同士で自己紹介でもしようつてぎ。俺は宿題でもしてるから構わんが、下校時間前には戻ってきてくれ」

「了解」

「じゃな」

「うん。また後で」

なぜか突然、暗黒史のことを思いだした。

文学部で内紛を起こし、SF研を設立したとかいう二十年前の先輩達。よくまあ、そんな面倒なことをしたもんだ。仲間とも教師とも喧嘩して、不自由な場所ですてきな縛りを受けて。

好きな小説を書きたければ、勝手に一人で書けばいいだろうに。三年経てば、どうせ卒業だろうが。どうしてそう、よけいな情熱がありあまつてるやつばかりなのかね。

「アー、困夫」

切れかけた通話に待ったをかけるように、あわてて声をかける。

「なに？」

「昨日は、すまなかったな」

「なんのこと？」

「いや、いいんだ」

誘ってくれて、ありがとうな。

「じゃあな」

「うん」

通話を切る。水影も、誰かと話をしていたらしい。携帯電話を机の上に置くところだった。

目を閉じる。少しだけ、頬が熱い。

瞼を開く。よし、さっさと宿題を片つけるか。

11 / 19 「花房視点」ワンピースの少女

ずいぶん、宿題に集中していた。

一度だけ、未緒をみかけた。困夫にスコアを訊いてから、十分も経たなかつただろうが。手に文庫本をぶらさげ、図書準備室に入り、数分と経たずにてきた。

文庫の表紙イラストが、朝とは違っていた。今度は学制服の男子だった。タイトルに きんとん という文字があるから、上下巻かなにかなのだろう。読んだことのある小説なら、話しかけるチャンスだったんだがな。あの文庫も、高校生に不適切だとかいう理由でここに納められた本なんだろうか。それ以外は、ずっと姿をみかけなかった。なにせ天井近くまである書架だ、奥のほうにいるとさっぱりわからない。

だから、急に声をかけられたときはびっくりした。

「……あの」

顔をあげると、隣に人影があつた。未緒が、息をこらえるような表情をして立っている。

「その……」

俺はシャーペンをとめ、言葉の続きを待った。

なんだろう。トイレの場所を教えてくれ、とかじゃなさそうだな。

「……………」

顔を逸らし、未緒はうつむいたまま、動かなくなつた。

隣の机で勉強していた水影が、顔を起こした。立ち上がり、こちらへやってくる。

「花房君、よければいいけれど、ケータイ見せてもらっても構わない？ さっきの、新機種よね。合格祝い？ もちろんメールとかは見えないから、少

し触らせてくれる？」

「え？ ああ、いいですよ」

内ポケットから携帯電話をとりだし、渡した。

「ありがとう」

水影は少し離れて、カウンターにもたれながら携帯電話を操作し始めた。さて。視線を戻すと、やっぱり困った顔でフリーズしている未緒がいた。気のせいかな、ちょっと怒った表情になっている。

「元が、小さく動いていた。耳を澄ますと、小声でブツブツ言っているのが聞き取れた。」

「そうか……そもそもなんでわたしがこんなことしなくちゃいけないのよ……あのこったらさいきんなまいきになってきてるんじゃないかしら……」「こらでちよつとしめあげてや」

「へ？」

「は？」

小さく未緒は後ろに飛びすさった。不安と敵意が混じった顔で、俺を睨みつける。

「なに？ なんなの？」

「い、いや、なんでもない」

「なんだ？ いま、こいつ、なにを言ってた？」

「——ム？」

未緒の表情。不安そつにまばたきする顔。

そつだ。そもそも俺が、朝の通学電車でこの女子を気にしたのは……。

「こ、ごめんなさい！」

頬を赤くした未緒が、言い訳しながら後ずさっていく。

「あの、やっぱりいいの！ なんでもなかったの！ あは、あは、そつよね。私ったら、ちよつと勘違い。あんたなんか話しかけることなんてあるわけないわ！ え？ あ、ち、違うの！ あんたなんかなんて、ごめんなさい、私、口下手で、いまの言い間違あひゃあー！」

カウンター前の水影に肩を叩かれ、飛びあがる未緒。こくろうさん。小さく耳元へささやくのが聞こえた。

「はい、花房君ありがと。そろそろ買い換えようかと思っていたけど、最近のは機能が多いのね」

机の上に携帯電話を置き、水影は廊下側の机へと戻った。

「あ、ごつち」

さて。視線を戻すと、やっぱり——。

「なんか……めつちや睨まれてるんだが……。」

「あのな、寒桜さん」

「なによ」

「困夫と紛らわしいから、下の名前で呼んでもいいか？」

「ぎろん。」

聞き覚えのある、変な擬音が出た。

「好きにすれば？」

「すまん」

俺、なんか悪いことしたか？

「ちよつと訊きたいんだが……先月の末、駅前にいなかったか？ 水色のワンピース着てさ」

未緒は、きよんとした顔になった。

それは三月中旬、玖乃杜高校の合格発表日だった。

それは三月中旬、玖乃杜高校の合格発表日だった。

強引にひっぱらないと、親父はすぐ約束を反故にする。無事に合格した俺は、親父の後ろ襟をひつつかんで、そのまま駅前前のケータイシヨップへ連れこんだ。

店員が手続きをしている間、しばらく待ち時間があった。俺はぼんやり、ウィンドウ越しに表の通りを眺めていた。道路を挟んだ向こう側、スーパ―があった。歩道には二十台くらいの自転車が一列に駐輪されていた。

ひとりの少女が、歩いてきた。水色のワンピース、編み目の粗いニットの肩掛けを羽織っていた。

「その女子は」

俺は、一方的に話っていた。未緒は、隣の椅子で小さく縮こまっている。いつもの通学電車で見える、あの仏頂面になっていた。

「急に立ち止まると、動かなくなつた。よく見ると、自転車に犬がつかげられていたんだ。マルチーズだつたと思う。たぶん、犬が苦手な子だつたんだろつな」

少女はしばらく迷っていた。やがて、歩道を引き返すと横断歩道を渡り、俺の目の前を通り過ぎていった。小さな愛玩犬一匹のために、遠回りしたわけだ。

「……………それで？」

「それだけだ」

「どうして、今頃？」

「いや、あのときの女子は髪がもっと長くて、肩の後ろくらいまであつたな。私服だつたし、髪にリボンもしていたし」

「そうじゃなくて」

すつと未緒は息を吸って、背筋を伸ばした。

「一ヶ月以上も前に、一度見かけたただけの子を、どうして覚えてられたの？」
ああ、なるほど。

言われてみればその通りだ。なぜだろう。

「それは……………そうだな……………やっぱり……………」

恐らく、深層意識のなせる技だろう。

四月、通学電車内で何度も未緒の顔を見かけた。しかし、短い髪で制服姿というギャップに、意識の上では三月のことを思いだせなかった。だが、深層意識は絶えずノックされていたのだろう。絶え間なく、コンコン、コンコンと。そしてついさっき、未緒の表情がひときわ大きな打撃音となり、寝呆すけのエピソード記憶が目覚ましたというわけだ。

「か……………かわいかつたから、かな」

ん？

なにを言つとるんだ、俺は。

「…………………………」

目の前に、未緒の顔があつた。口を半開きにし、眉根を寄せ、なにか苦いものを食べたような表情をしている。雲型の吹きだしをつけてセリフを書き込むとしたら、「ウワ！ きも！」「男子最悪！」「てどこだろうか。」

「えーと……………」

未緒の表情が、どんどん険悪になる。ドス黒いオーラに空間が歪んできているような。

重い沈黙。

「花ちゃんゴメン、待たせたね」

ガラリと扉が開いて。

人気絶頂の若手漫才コンビみたいに、ほがらかな表情の困夫と湯船が立つ

ていた。

「お！ おう！ 待っていたぞ、困夫！ ありがとな！」
勢いよく俺は立ち上がる。暗黒空間、脱出。

「なんのこと？」

「なんでもない！ さあ、先輩、自己紹介でもなんでもしましよせ！」

ぎくしゃくと困夫達のほうへ足を踏みだしたとき。

学ランの裾をむんずとつかまれた。

「花房君……」

「な、なんだ」

「花房君がみかけたのは、私。いい？」

なんかそれだと、本当は違つみたいない方だが。

「わかつた？」

ぎゅり。学ランの裾がねじれた。

「わ、わかつた」

バツと裾を離され、俺は数歩たたを踏んだ。と同時に、チャイムが鳴った。
もう五時半なんだね。腕時計を見ながら湯船が言った。

12 / 19 「姫百合視点」 大判焼き食べたい

美術部員をがっかりさせるのは、簡単だ。書きあげたデッサンを裏返して、陽の光に透かすだけでいい。

(うわあ……)

裏向きにただけで、バランスの崩れがわかってしまつ。世の中のどんなものだって、鏡に映しても本物そっくりなのに、僕が描いたものはあつといつ間に偽物だとバレてしまつ。

チャイムが鳴った。教室の時計を見上げると、午後五時半。八時限目の終わりを告げるチャイムだ。

(……帰っちゃあ)

イーゼルを持ち上げ、運ぶ。美術準備室に片づけけないといけない。

美術誌をめくつていた楠木先輩が、顔をあげた。

「今日はこれで終わり？」

「きりがいいですしね。帰ります」

ガバツ。甘宮先輩が跳ね起きた。

「大判焼きおこつて！」

「……………」

「……………」

多分、僕も楠木先輩も、同じことを考えている。

一、この人は寝ていたんじゃないか。

二、この人は寝ぼけてるんだろうか。

三、でも普段の言動そのものが寝ぼけてるしなあ。

「いいですよ」

いろんなことが面倒くさくなった僕の口から、そういう返事が転がり落ちた。

「ほんと？ わーい、やったー！」

「あ、ごめん。私は、もう少し残ろつと思つた」

楠木先輩が、両手をあわせて小さく拝むようにした。次の絵のモチーフに

悩んでいるらしい。今日は何度も準備室をでたり入ったりしては、いろんな本を眺めていた。

しばらく甘宮先輩は、さまざまなジェスチャーをまじえ甘言を弄して誘惑していた。でも、創作モードに入った楠木先輩の考えを変えるのは無理だった。僕はイーゼルを片づけ、甘宮先輩と一緒に玄関をでた。

自転車を押しながら、駅の方へ向かう。普段は自転車通学なので、あまり駅周辺は行ったことがない。日没には間があるけれど、空の色は変わり始めていた。甘宮先輩は、少し先を歩いている。

「そういえば先輩。フィルム、なんに使ったんです?」

「ふいるむう?」

聞きなれない外国の地名を口にするように。

「ポラロイドカメラの。枚数が、ゼロになってましたよ」

「アー、うん、そっか」

「いいんですか? ほら、花見のとき、宮地先生に怒られてたじゃないですか」

「そういえば、おソメさんを初めてみかけたのも、あのときだった」

四月、新学期が始まったばかりの頃だった。僕の歓迎を兼ねて、河原の桜並木で花見をしてくれることになった。美術部員らしくスケッチブックを片手に、なんてことにはならず、そのかわり甘宮先輩が持ってきたのがポラロイドカメラだった。

子犬をみつけ、なにこの可愛い生き物うははバシバシと無駄にシャッターを押していた。

（おまえは染井川でみつけたUMAじゃ!）

と、甘宮先輩は宣言した。

（じゃから名前はおソメさんじゃ! 決定!）

後で知ったけど、ポラロイドカメラのフィルムは生産が中止されてしまったので、入手が難しいらしい。甘宮先輩は宮地先生にこつてりと叱られた。あなたたちがずつと思いい出に残したくなるような、そういう大切なときまで使っちゃダメです! と、宮地先生は命じた。

「うー、そんなこともあったなえ」

「遅かれ早かれ気づかれるんですから、フィルムまた使ったこと、早めに謝ってくださいよ」

「短い間に姫百合君、こんなに成長してくれて……」

「話をそらそつとしても、ダメですよ」

「育てすぎた……」

自転車の向こう側から、甘宮先輩が鞆を荷台に乗せた。運んでいけということらしい。

「そもそも、先輩はどうして美術部にいるんです?」

「エーとね」

身軽になった甘宮先輩は、頭の後ろで手を組んで、斜め上をみつめた。

「宮地先生って優しいから、別ににもしなくていいし。紅茶飲めるし。あと文化祭、クラスの企画とかさばれるよ!」

ああ……。

やる気をだすと凄いい作品を創りあげる天才肌なタイプとか期待していた自分がバカだった……。

「だったら、帰宅部でもいいじゃないですか。学校でひまつぶししてるくらいなら、家に帰るか、街で遊んだほうがいいんじゃないですか?」

「家に帰ってもつまんないし、街で遊ぶお金ないもん。亜里砂ちゃんとか姫

百合君とひまつぶしてたほうが楽しいよ」

それがすんごく迷惑なんですけどね。僕はムツツリ唇を閉じて、不機嫌そうな顔をした。まあ、本気でそれを告げても、甘宮先輩は笑って僕に「ごめんごめんと言うだけだろう。どっちにしろ、明日もこりずに美術室へ来てくれる。

「なに、姬ちゃん、なに笑ってるのさ」

「笑ってなんかいませんよ」

だから明日。

楠木先輩と二人で、甘宮先輩に大判焼きをおごってもらおう。普段の迷惑料代わりに。

それくらいは、してもらわないとなあ。

13 / 19 「花房視点」 用務員の宇美音さん

どうやら、水影以外に上級生の部員はいないようだ。

五人が同じ机に集まり、自己紹介をした。それが一周すると、なし崩しに雑談が始まった。困夫のテンションがやけに高く、会話が盛りあがった。

「あのお……」

入り口から、声がした。

全員の視線が、扉に集まる。中年女性が、そこに立っていた。つなぎを着て、土木工事でも始めそうな格好だ。

「橘先生は、こちらに……」

「あ、宇美音さん」

水影が立ち上がった。

確かに、そんな名前だったな。この学校の用務員をしているらしい。校内のいろんなところでみかける人だ。

「いえ、来ていませんが」

橘先生なら、今日は風邪で休みでしたよ。俺が補足した。

「いえ、いらしてますよあ」

ぶらぶらと宇美音は顔の前で手を振った。

「風邪、治りなされたそう。理科準備室の鍵を借りていかれました」

「……それは、いつですか？」

水影が、首を斜めにして訊いた。

「放課後すぐですよあ。それはいいんですけど先生、まだ鍵を返してもらってないんで……」

キーボックスは、職員室にある。宇美音さんがいれば宇美音さんが、いなければ他の教職員が鍵を渡す。

南京錠だから、施錠は鍵がなくともできる。借りた鍵は、解錠したらすぐ返しに行くことになっていた。

「また前みたいに、鍵を部屋の中、うっかり置き忘れたまま帰っちゃったんじゃないかと思ひましてねえ。いちいち先生のお家に電話するのもなんですし」

「わかりました。鍵を置き忘れていただけかもしれないから、スペアキーかなにかで部屋に入ろうということですね？」

「生徒さんに迷惑おかけするの申し訳ないですけど、ちょっと私一人で入るのもあれですからあ」

「ええ、もちろんかまいません。理科準備室は、誰もいないんですね？」

「ダメですよ。全然ダメですねえ。まあつくらすし、鍵もかかっています」
 「わかりました。では、様子を見に行きましょつ」

「僕も行く！」

急に困夫が立ち上がった。やけに真面目な顔をしている。少し遅れて、湯船も立ち上がった。

あい、すみませんねえ。宇美音さんと一緒に、水影、困夫、湯船が連れだつて図書室をでていった。

(……ん?)

水影はわかる。橘は図書班の顧問で、水影は図書班の班長だからな。

だが、困夫と湯船が付き添う理由については、無い気がするんだが。

14 / 19 「花房視点」なくなったの

さて、どうしたものか。

向かい側、ぼつんと座っている未緒。まさか、急に二人きりなんて事態は、想定していなかった。

水影達がでていってすぐ、チャイムが鳴った。午後六時、下校時刻だ。それから五分以上は経過しているだろうか。

沈黙が、やけに重い。なにか話しかけるべきだと、思つてはいる。だが、どうも顔を見ると、視線を逸らしてしまう。

それはどうやら、向こうも同じだったらしい。何度目かの逡巡の後、未緒は口を開いた。

「あの……」

「なんだ」

おつと。こつという返事は、ぶつきらほうと思われるか？

幸い、未緒は気にしなかつたらしい。軽く上目遣いで、話を続けた。

「困夫のことだけど……仲がいいの？」

「まあ、暇なときダべるくらいだな。どちらかというつと、困夫は湯船と仲がいいんじゃないか？」

「湯船君は、中学から一緒なの」

「ああ、そつだったのか」

「あのね」

未緒が、俺の顔をまつすぐに見据えた。

眼鏡のレンズに、蛍光灯が映っている。

「あなたつて、変人じゃない」

「……………」

なんだろう。

いまなにか、聞き間違いをした気がしたが。

「だから、その……あの子かになにか変なことしても、あまり怒らないでくれると助かるんだけど……………」

いらつているのか、未緒は机の上に肘をつき、複雑に両手の指を絡めた。落ち着きなく左右に視線を走らせている。

「よくわからんな。困夫が、なにかするつてのつか？ アイツは別に、揉め事を起こすヤツには見えんが」

普段の会話からすると、むしろ困夫には冷めたイメージがある。あのコケティッシュなニヤニヤ笑いは、なにかを熱く語つたり、率先して皆を先導するタイプではない。

「猫かぶってるだけよ。」

「猫、ねえ。」

「甘えんぼなの。ちょっと仲がよくなると、すぐにたがが外れちゃう。ホント、あの子のせいで、どれだけみんなに迷惑かけたか。湯船君も流されるだけでストッパーになってくれないし。ああ……もう……」

ダン、と足を踏みならす音がした。

もちろん、俺がそうしたわけではない。

「やつぱりあのとき、シメすぎたのが悪かったかしら……ううん、犬と同じなんだから悪いところはしつけないと……」

握り拳を固め、未緒はうつむいたまま、小声でなにかブツブツつぶやき続けていた。

俺はそっと、窓のほうを向いた。夕空の美しさに声もなく感動していると、内ポケットで携帯電話がふるえた。

「花房君？」

水影の声だ。

「まだ図書室よね？ ちょっと頼まれてくれる？」

「喜んで。ここ以外どこでも駆けつけます」

……あれ？

俺の番号って、教えたっけ？

「未緒さんと一緒に、特別教室棟を見て回ってくれる？ もし誰が残っていたら、ひきとめてほしいの。理由は、そっね、殿村先生の命令ってことにして」

「は？ はあ、わかりました」

「それが終わったら、保健室に行つてね」

「保健室？ 橘先生、風邪でぶつ倒れてたんですか？」

「倒れたのは困夫君。大丈夫、気を失っただけ。わけがわからん。」

理科準備室に行つて、なんで困夫が気を失うんだ。

「なにかあったんですか？」

少し、言いよどむ気配がした。

「橘先生が、ナクナツタの」

無くなった？ いなくなった？

いや違う——亡くなった、だ。

「ころされたのかも」

ぼつりと、水影はつけくわえた。

15 / 19 「花房視点」 事件の翌朝

いつもの朝。いつもの光景。

車窓を流れる新緑、揺れる吊革。

臉を細めたまま動かない高校生。

「よつす」

「ん……おはよ」

ずいぶん、眠そうな顔をしている。さすがに今朝は、チェシャ猫も疲れてるらしい。

「たまには、座るか？」

「え？ ああ、大丈夫だよ」

「昨日は驚いたな」

ふっと臉が開いた。まじまじと俺をみつめ、それから、小さくうなずいた。こんな覇気のない困夫を目にするのは、初めてだ。

「参ったね」

今朝の新聞記事では、はっきり他殺と書かれていた。

「授業、あると思うか？」

「どうだろ……」

昨日、保健室で湯船に聞いた話によると。

橋はうつぶせに倒れ、後頭部に血がにじんでいた。床に垂れ落ちるほどではなく、見た目は小さな傷だったそぞだ。ただ、息をしている気配はなかった。水影が脈をとったが、そもそも体温がなかった。

宇美音が職員室へ知らせに走った。失神した困夫を、湯船が保健室までおぶって運んだ。水影は、教師達が駆けつけるまで見張り番をしていたらしい。その間に思いついて、俺に電話したわけだ。

俺のほうはというと。

水影の指示通り、未緒と一緒に特別教室棟を見て回った。しかし、誰も残っていないかったし、どの部屋も鍵が閉まっていた。で、保健室で待っていた。しばらくして水影もやってきた。

六時半くらいだったか、殿村に、発見者以外は帰ってよしと言われた。いや、むしろ邪魔だ帰れと命じられた。靴をとってくるため、全員で一度だけ図書室に戻った。あ、困夫はまだ意識が戻ってなかったから、湯船が代わり

に保健室へ靴を持っていったが、最後に、水影が図書室を南京錠で施錠した。

「あのあと、どうだったんだ？ カツ丼とか食ったのか？」

あえて、軽くふざけた調子で言ってみる。だが、その効果はなかったよう

だ。半分眠ったような目で、困夫は面倒くさそうに答えた。

「いやあ、大したことなかったよ。めっちゃ待たされて、三回くらい同じこと聞かれて、三回くらい同じこと話して、それで終わり」

視線を横へ走らせる。いつも通り、仏頂面で文庫本を読んでいる未緒がいた。

昨日の夕方。

困夫は足止めされたので、俺は未緒と帰ることになった。玄関前に、えらい数のパトカーが駐まっていた。初めて事態の深刻さを思い知らされた。

すっかり暗くなった道を歩きながら、ぼつぼつと、話をした。困夫が失神したのは、血に弱いからだそぞだ。かすり傷でも流血を目にすると気分を悪くするという。自分の鼻血で気絶したり、ホラー映画のCMに悲鳴をあげたこともあったらしい。

(むかし、いじめすぎたから)

そうつぶやき、未緒は暗い顔でうつむいた。

俺はいろんな意味で言葉を返せず、後はずっと無言だった。

「……噂するのは、足が速いもんだな」

校門を過ぎ、玄関に入る。殺人というセンセーショナルな話題をささやく声が、次第に大きくなっていく。

正直なところ。橋の死が悲しいかと訊かれたら、答えにくい。入学から一ヶ月も経っておらず、授業を受けたのも数回程度だ。ショックを受けるとすれば、水影か。図書班の顧問として、それなりにつきあいがあつただろうからな。

下駄箱を開ける。上履きを手にし、ふっと記憶がよみがえった。

(そついや、あれはなんだつたんだ?)

昨日の朝、ここに入っていた挑戦状。

やけにあまいな内容だった。挑戦状と題しておきながら、なにを挑戦してるのか、サッパリわからん。一応、気にはしていた。盗難にご用心という文章からすると、俺からなにかを盗むつもりのようなのだ。しかし、家に帰ってから鞆やポケットの中を確認したが、なくなっただけのものではなかった。

内ポケットで、携帯電話が震える。とりだすと、スチャ からのメールだった。

(こんな時間に珍しいな)

内容は簡潔だった。

ただ、意味がわからなかった。

「困夫、時間はあるか？」

「ホームルームをさぼる気がないなら、あと十五分くらいはあるね。なに？」

メールに書かれていたことは、三つ。

図書準備室に来ること。

ロッカーの鍵を持つてくること。

一人ではなく、誰かと一緒に行くこと。

16 / 19 「花房視点」 あそぼうよ

職員室へ行き、忘れ物をしたという理由で図書室の鍵を借りた。駆け足で階段を二階へあがる。

「ほ、放課後でもよかつたんじゃない？」

「そつ、だ、な」

俺は切れ切れに答えた。さすがに息が荒い。

「スチャって、図書班の、元部員？」

「知らん。本当に、知らん」

まあ、確かにそつでなければ、ロッカーの存在など知らないはずだしな。

(……そうか?)

水影はなんて言ってた?

鍵をつけたのは、昨日からだとか言ってたか?

(どうして、スチャが……)

二階に到着。図書準備室の扉へ駆けつける。

「あ、ムリムリ。花ちゃん、そっちはダメ」

「八？」

「そこ、開かずの扉だから。扉を開けても本がぐちゃぐちゃで、入れないから」

昨日の光景を思い出す。そつだった、床まで本が山積みで、足の踏み場も無かったな。

「そもそも、図書室と図書準備室とで、鍵って違うしね」

「了解」

図書室のほうの入り口へ向かう。南京錠を解錠し、室内へ足を踏み入れる。カウンター奥の扉から、準備室へ。

困夫が、カーテンと暗幕を手早くたぐった。俺は、水影から借りた鍵をとります。黒猫のキーホルダーが揺れた。昨日の放課後、すぐには図書室に来れないからと渡された鍵だ。

ロッカーの南京錠に差し込む。苦もなく、回転。U字形部分が外れた。

「——開けるぞ？」

「うん」

扉を引く。

下の段は、昨日と同じ。薄い本が詰まっている。

上の段は――。

「ハア？」

シガニー・ウィーバーがいた。

「……あれえ？」

困夫が、間の抜けた表情になる。俺は、写真立てを手にとり、ためつすがめつした。

「それって、橋先生の机にあったやつだよな？」

「多分、そうだな。理科準備室のやつだ」

あ、ひよつとして、素手で触っちゃまずかったか？

今更ながら、写真立てをロッカーに戻す。

「うん、昨日、宇美音さんと理科準備室に入ったときも、机に無かったから、おかしいと思ってたんだ。これって、どうしよ。警察に言っつ？」

「それはまあ、伝えるべきじゃないか？」

「言わないほうがいいんじゃない？」

「いや、なにが殺人に関係してるか、わかったもんじゃない。素人があんまり……ん？」

伝えると、どうなる？

昨日、ここを施設したのは誰だ？

「疑われるのは、俺か」

「あるいは、僕だね。スピーキーとか持ってんだろって」

「あるのか？」

「無いよ」

薄く、困夫は笑っていた。こいつ、状況を楽しんでやがる。

そのときだった。内ポケットで振動がした。

携帯電話をとりだす。番号は、非通知だった。誰だ？

「はい」

「やあ」

ぎよつとした。

合成音だ。ボイスチェンジャーかなにかで作った声。性別さえ、わからない。

「ロッカーは、みてくれた？」

「見た。スチャ、おまえか？」

「うん」

「なにを覚えてんだ？ まさか、おまえ……」

「次は、引き出し」

「引き出し？」

「パソコンのとこ。左側」

困夫が、動いた。作業机の上のデスクトップパソコン。確かに、天板の下

に、引き出しがあった。

これ？ 取っ手に指をかけ、困夫が振り返る。俺はうなずいた。

困夫が、引き出しを開ける。

「引き出しが、どうしたって？」

スチャは答えなかった。

困夫が、ゆっくりこつちを振り向いた。

今にも泣きだしそうな、そんな表情で。

「なにがあった？」

「まずいよ……」

一歩、足を踏みだす。 困夫が立っている位置へ。

俺にも、中が見えた。

そこには、木槌が転がっていた。 ただの、木槌が。

「これ……絶対まずい……」

強いて特徴をあげれば。

その打撃面には、べったり赤黒いものがついていた。

その赤はどうみても——血としか思えない。

「どうしよ……」

スーツと困夫の顔が蒼白になり。

ふらりと揺らいだ。

「困夫——」

携帯を耳から離し、あわてて腕を伸ばした。 困夫の身体を支える。

「くそ——」

片腕で困夫をゆっくり床に下ろしつつ、もう片方の手で携帯電話を耳に当て直す。

「スチャ！ どういうことだ！」

「ぼくが、ころしたと、おもってる？」

「……………」

「もう、わかってるだろ？ ぼくは君のすぐ近くにいる。そしてすでに、ぼくはきみを知っている。きみもぼくを、知っているかもしれない……べつの名前でね」

「なにがしたい？ スチャ、ハッキリ言え！」

「あそぼつよ」

ざらついた音がした。 短く、断続的な。

それは、抑えかねた笑い声だった。 喉の奥で鳴る息が、機械によって歪められ、不気味な音に変貌していた。

「たのしかったじゃないか、はなぶさりつくん。 ふたりでした探偵ごっこをわすれたわけじゃないよねえ？ あんなにたのしくあたまを悩ませあったじゃないか。 かんがえろ！ かんがえろ！ かんがえろ！ かんがえろ！ たちばなが死んだことなんて、きみはどうせかなしくもなんともないんだろっ？」

風のうなりにも似た笑い声が、ひとしきり続いた。

「スチャ、俺はもう——」

「きをつけたほうがいい。 さくやの捜査会議で、内部犯もつたがうことになったからね。 あしたのあさ、またここにおいて。 メールをおくるよ」

じゃあね。

その一言を最後に、通話が切れた。

17 / 19 「花房視点」 保健室に集まるろっ

失礼します。 そう声をかけて、保健室の扉を開けた。

ベッドに困夫が寝ていた。 その傍ら、パイプ椅子に未緒がいた。

正確には、未緒は座っていなかった。 半立ちで、腕を伸ばして。

困夫の頬を、つまんでいた。

「……………」

むにむに。 むにむに。

驚くほど柔らかく、伸びたり歪んだり。それにあわせて困夫の表情が面白おかしく変わる。

同時に、未緒の表情も変化した。笑顔になったり、愛おしそうになったり。

「アー、その……」

未緒が、振り返った。俺の姿を認め、弛緩していた顔がみるみるうちに真面目な表情へと変わっていく。

べたり。力が抜けたようにパイプ椅子へ腰を落とした。

「困夫の具合はどうだ？」

「わたしはなんでもありません」

「他の奴らは、まだか？」

「わたしはなんでもありません」

眼鏡を外すと、ハンカチでレンズを拭きはじめた。けっこう度があるらしく、レンズ越しの光景が歪む。

手近な椅子に、俺は腰掛けた。頭の中で、猿の盆踊りを思い浮かべる。ぴーひゃらら、ぴーぴーひゃらら。

来い。誰か来い。俺がこの沈黙に息詰まる前に、さっさと早く誰か来い。

「や」

入り口が開くと、右手をあげた湯船が立っていた。

「湯船……恩に着る」

「ん？ なにが？」

「なんでもない。まったく、なんでもない」

「あれ、保健の先生は？」

これは未緒への質問だった。

「でてった」

眼鏡をかけなおし、未緒は平常モードに戻っていた。

「用事があるみたい。職員室にいるって」

今朝、図書準備室で倒れた困夫を、俺は背負って保健室へ運んだ。教室に戻ると、とくにホームルームは終わっていた。授業は中止となり、生徒はみな下校となった。

といつても、俺は帰るわけにいかなかった。昨日の放課後、特別教室棟やその周辺にいた者は、会議室に集められた。けっこうな大人数だった。一人ずつ呼ばれては、警察の事情聴取を受けた。

事情聴取の直前、図書班のメンバーに、困夫が倒れたことを告げた。ただ、周囲に人の目があるため、なぜ困夫が倒れたのか理由を言いくかかった。

水影は俺の様子を察してくれたらしく、事情聴取の後で保健室に集まりましようと思案してくれた。

「そういえば、昨日の試合って、けっきょくどうなったんだ？」

湯船の顔で、思いだした。昨日の自己紹介では、特にその話題はでてこなかった。

「ンーとね、新入部員チームの勝ち」

湯船が、誰もいないベッドの端に腰掛ける。ふよんふよんと、腰を上下させて柔らかさを楽しんでいる。

「へー、逆転したのか」

「ずーと三対二だったけど、でっかいヒットで二点も入ってね。困夫君スコア読めなくて訊かれたときだったから、よく覚えてるよ」

軽く雑談をしながら待つこと十五分、水影がやってきた。

さっそく、俺は説明を始めた。スチャのこと、写真立てと木槌が見つかったこと、合成音で電話があったこと。

俺の話聞き終えると、水影は即座に言った。警察に、伝えましょう。

「スチャという人がなにをしたいのか知らないけど、私たちが黙っているメリットはなにもないわ。花房君、身に覚えがないなら、ありのままに証言したほうがいい」

そう、そのとおり。

そのとおりなんだが。

「明日の朝、メールを受けとるまで待つわけにはいかないですか？」

「どうして？」

ベッド脇、立ったままの水影は軽く首を傾げた。

「スチャという人は、警察に知らせるなど脅したわけではないでしょう？ それくらい、覚悟の上じゃない？」

「いや……たぶんスチャは、俺が知らせないと思っている」

「なぜ？」

俺は、息を呑んだ。

自分がなにを言っているのか、よくわからなくなった。こんなことを言うつもりは、さつきまでひとかけらもなかった。おかしい。俺は、一度だってこんなことを考えたことはない。それなのに、自動的にその言葉は口からこぼれおちてきた。

「つまり……俺が、スチャを信じてるからです」

「殺人犯を？ 名前しか知らない正体不明の人を？」

水影の返答は早く、的確で、重かった。

未緒や湯船が、気まずそうな顔をしている。

「確かに、スチャが犯人である可能性は高い。ほぼ確定だ。それは、俺も認めます」

のろのろと、頭の中に言葉を探した。

「でもアイツは……」

スチャと初めて言葉を交わしたのは、二年前。

ネット掲示板に、ときどき書き込みをしていた。

そこは、実際にあった刑事事件を話題にしていた。俺はよく、適当な推理を書き込んでいた。

いまにして思えば、稚拙な内容だったと思う。だがスチャは、興味を持つたらしい。やがて、メールでの情報交換が始まった。

たいがい、ネタを持ち込むのはスチャだった。情報収集力では、圧倒的にスチャが勝っていた。こんなまで落ちていたと、犯人の個人情報や、殺人現場の写真を送ってきたこともあった。

それを読みながら、俺は思う存分に奇説珍説を繰り広げた。推理が真相と一致したときは、爽快だった。

「アイツは……」

その あそび から手を引いたのは、去年の六月。

俺のいとこが、自殺したときだった。

「……違うんだ」

これ、本当に自殺だと思う？ わざわざ学校で首を吊るかな？ 部活で仲の悪い子がいたみたいだね。自殺だとして誰かへのあてつけ？ このクラスの裏サイトみつかったよ！ 看護師の母親が推理ドラマ好きなんだってさ。当直だったみたいだけど病院の位置からするとアリバイ工作なんてあるかもね！

「手遅れになるようなヤツじゃ、ないんだ」

俺は、メールを無視した。

スチャから送られてくる情報を、すべて破棄した。

代わりに、返事を書いた。もう、終わりにしよう。自分たちのやっていることは、不謹慎だ。

どうしても、この あそび を続けたいなら。

俺はおまえと縁を切る。

「……………たぶん」

俺は、バカだ。

あのとき、よけいな返事なんぞ書かなきゃよかったんだ。黙ってメールアドレスを解約して、縁を切っていたらよかった。

だってそつだろう？ 顔も、本名も知らない。性別も、どこに住んでいるのかも、学生なのか社会人なのかすら知らない。

スチャなんて、俺にはただのデジタルデータだ。あいつにとっての俺だつて、そつに違いない。

それなのに、スチャは返事をした。短く、簡潔に。わかつた。

この あそび を、終わりにしよう。

「……………」

俺は、なにも言えなくなった。

腰に手をあて、水影が俺をみつめている。睨みつけている、といつてもいい視線で。

「花ちゃん」

思ってもみなかった方向から、声がした。

「スチャって人は、犯人じゃないって信じてるの？」

ベッドの上、困夫が上半身を起こしていた。

「おまえ、いつから起きてたんだ？」

「えーとね、水影先輩に説明してる途中から。それよりさ、質問に答えてよ」

「いや、俺は……スチャが犯人ではないとは、思っていない。犯人で、間違いないくらいに思ってる」

「じゃあ、なにを信じてるのさ」

「——ブライドだ」

苦し紛れの言葉だった。だが、他に形容しがたい。

「知的ブライドだ。スチャは、良識がない。ためらいなく犯罪にだって手を染める。人を傷つけることだってするかもしれん。だが、ブライドを捨てることはしない」

「それって例えば、もしも花房君が推理で真相をつきとめられたら、スチャは自首するだろうってこと？」

「そつだ。スチャが犯人ならな」

ぐつと拳を握る。喉ではなく、腹から声をだした。

「俺は、アイツの あそび につきあつ」

困夫が、隣のベッドに目を向けた。湯船が気の抜けた笑顔を返した。

「ユーちゃん、事情聴取、正直に答えた？」

「うん。ちゃんと答えたよ」

「それつつまり、僕と一緒に野球部の試合を見てたことか？」

「そつだよ？ すつと見物してたよね？」

フツと短く息を吐き、困夫は力のない笑い顔になった。

「ミーちゃんも？」

「言えるわけないでしょ、あんなこと」

険悪な表情で、未緒は答えた。

「先輩は？」

「私は、なにも隠すことなんてないもの。訊かれたことには正直に答えました」

「あ、そっか。ずるいなあ」

くすくすと困夫は声をあげて笑った。

「……おまえたち、なにを言ってるんだ？」

奇妙な雰囲気だった。水影も湯船も、どこか不気味な感じで微笑んでいる。未緒まで、不快そうにしていた顔がやわらいできた。

ハア、と水影がため息をひとつついた。

「図書班の歴史も、おしまいな。明日、まとめて怒られましょ」

「先輩、ごめんね」

「鍵は私が借りてくるから。朝八時、第二図書室に集合。いいわね？」
ちよつと待つて。

おまえら、俺になにを隠してる？

18 / 19 「花房視点」僕がやるよ

事件の翌々日。朝八時、第二図書室。

俺の携帯電話に、スチャからのメールは届かなかった。

届いたのは、別のところだった。図書準備室のパソコン、図書班の専用メールアドレスに、添付ファイルつきのメールが届いていた。

「少なくともこれで」

テキストファイルをスクロールさせながら、水影は静かに言った。

「スチャが犯罪者なのは確定ね。盗聴なのか、不正アクセス禁止法違反なのかは知らないけど」

確かに、それは疑う余地がなかった。

添付ファイルには、昨日の事情聴取で各自が証言したことがまとめられている。

それだけじゃない。殺害現場の見取り図、聞き込みで得た情報、検屍結果、簡潔に編集されているが、不正な方法でなければ得られない情報ばかりだ。

「スチャって人が犯人なら、これ、信じられないんじゃない？」

「たぶん、そこが花房君の言ってるた、ブライドってヤツだと思うよ」

未緒と湯船の会話に、俺は黙ってうなずく。

スクロールしていた水影の手が、とまった。そこには名前の一覧と、なにやらマルバツの記号があった。

「花ちゃん」

「……なんだ、困夫」

「ごめん。やつば昨日の話、なし」

「なんのことだ？」

「花ちゃんが探偵役をするって話」

それは、アリバイのまとめだった。

被害者の死亡推定時刻に、居場所が確かめられているかどうかまとめられていた。

「探偵は」

死亡推定時刻にアリバイのない人物は、ただひとり。

「僕がやるよ」

未緒だけだった。

19 / 19 スチヤからの情報

検屍結果

被害者の氏名は橘麗。

玖乃杜高校の物理教師。

死亡推定時刻は午後四時から四時半の間。

死因は後頭部への殴打による脳内出血。

ほぼ即死だったと推察される。

他に外傷は見受けられない。

創傷の状態から、凶器は平たい鈍器と推察される。

殺害現場の状況

被害者は窓際にうつぶせで倒れていた。

スラックスのポケットから、理科準備室の鍵が見つかった。

特に血痕はみつかっていない。

流血が少なく、床に垂れ落ちていなかった。

鍵、南京錠、廊下側の扉に、指紋が拭きとられた痕跡があった。

凶器は不明。それらしいものはみつかっていない。

事務機の脇に、書類鞆があった。

用務員の宇美音鳴子によると、鍵を借りに来たとき被害者がぶらさげていたものと同じと思われるとのこと。

机の上にはいくつかの書類があり、業務の途中だったと思われる。ただし、いくつかの物品に指紋を拭いた痕跡があった。

発見者の生徒から、写真立てが無くなっているとの証言があった。

しかし被害者が身につけていた金品、準備室の薬品や備品が盗まれた痕跡はみつかっていない。

キーボックスの管理簿

特別教室棟についての記録は以下の通り。

午後三時三十三分 姫百合郷が美術室、美術準備室の鍵を借りた。

午後三時三十四分 水影星子が第二図書室の鍵を借りた。

午後三時三十八分 姫百合郷が美術室、美術準備室の鍵を返却した。

午後三時三十九分 水影星子が第二図書室の鍵を返却した。

午後三時四十一分 被害者が理科準備室の鍵を借りた。

職員室には常に教職員がいた。

無断でキーボックスから鍵を持ちだせた可能性はない。

特別教室棟について

放課後、特別教室棟で使用された部屋は以下の通り。
他の部屋はすべて施錠されていた。

- ・一階 理科準備室
- ・二階 第一図書室、図書準備室
- ・三階 美術室、美術準備室

これらの部屋は特別教室棟の東端にある。

特別教室棟を出入りしたのは生徒八名、教師二名（被害者、殿村耕作）。

その他の人物が出入りした目撃証言は得られていない。

あわせて、「各階平面図」を参照すること。

現場周辺にいた生徒の証言

体育館で複数の運動部員が練習していた。体育館の周辺は絶えず人の出入りがあった。

校庭の東端にあるグラウンドで、野球部が紅白戦をしていた。

吹奏楽部の部員は校舎内で練習していたが、トランペットを担当していた部員数名が体育館と特別教室棟の間で練習をしていた。

これらの生徒に事情聴取をしたが、特別教室棟を出入りした生徒八名の証言と、特に矛盾した情報は得られなかった。

あわせて、「現場周辺図」を参照すること。

駅周辺での聞き込みも行った。

駅員や商店街関係者らから、美術部員（甘宮、楠木、姫百合）の目撃証言が複数得られた。

美術部員が、いったん下校した後、死体発見までの時刻に学校へ戻ってきた可能性はない。

各人の証言

特別教室棟を出入りした生徒八名の証言は以下の通り。

証言内容を「行動表」にまとめる。

花房 律

ホームルーム終了後、南棟三階の空き教室で仮眠。

目が覚めたとき、水影星子がいた。

携帯電話の時刻表示が午後四時一分だった。

二人で第二図書室へ移動。

途中、南棟の階段の踊り場から、特別教室棟三階の廊下にいる殿村教師、寒桜困夫、湯船想慈、甘宮杏を目撃。

ただし、甘宮杏とは面識がなかったため、その時点ではわからなかった。

途中、理科準備室が施錠されているのを目撃。

第一図書室で、水影星子と甘宮杏が短い会話。

図書準備室の窓から、グラウンド脇にいる寒桜困夫、湯船想慈を目撃。図書室で、水影星子と寒桜未緒が短い会話。

この直後、携帯電話の時刻表示が午後四時半だった。

寒桜困夫へ電話、試合の状況を質問。

携帯電話の通話履歴によると、午後四時四十分だった。

その後、寒桜未緒が図書準備室へ入るのを目撃。

しばらくして、寒桜未緒が話しかけてきた。

寒桜困夫、湯船想慈が図書室に戻ってきた。

チャイムが鳴り、湯船想慈が腕時計で午後五時半だと言及した。

午後四時半以降、水影星子は隣の机で勉強しており、席を離れなかった。

寒桜未緒は書架の奥におり、直接的には姿を見ていない。

水影星子

ホームルーム終了後、職員室で第二図書室の鍵を借りた。

解錠後、すぐ職員室へ返却した。

図書室へ戻ると、寒桜困夫、湯船想慈が来ていた。

しばらく雑談の後、花房律に会うため南棟へ向かった。

二人で第二図書室へ移動。

途中、南棟の階段の踊り場から、

特別教室棟の三階にいる殿村教師、寒桜困夫、湯船想慈、甘宮杏を目撃。

水影は甘宮杏と面識があり、はっきり視認できた。

以降、花房律の証言と相違無し。

寒桜未緒

ホームルーム終了後、担任教師に片付けの手伝いを頼まれた。

片付けが終わったのが教室の時計で午後四時過。第二図書室に移動。

その後は、ずっと図書室もしくは図書準備室にいた。

花房律の証言と相違無し。

書架の奥にいたため、花房律、水影星子からは姿が見えなかった。

寒桜困夫

ホームルーム終了後、湯船想慈と共に第二図書室に移動。

鍵は既に開いていた。やがて水影星子が到着。しばらく雑談。

午後四時前、水影星子が南棟へ向かった。

そのすぐ後、甘宮杏に誘われ、美術室前の廊下に移動。

バドミントンを始めたが、殿村教師にみつきり説教を受けた。

バドミントンの間、楠木亜里砂、姫百合郷はでてこなかった。

湯船想慈と共に外へ移動、野球部の紅白戦を観戦。

午後五時過ぎ、いったんトイレのため特別教室棟へ。数分程度で戻る。

それ以外は、試合終了の午後五時半前までグラウンド脇にずっといた。

野球部員ら複数の目撃証言がある。

湯船想慈

ホームルーム終了後、寒桜困夫と共に第二図書室に移動。

以降、寒桜困夫の証言と相違無し。

甘宮杏

ホームルーム終了後、美術室に移動。鍵は既に開いていた。やがて楠木亜里砂、姫百合郷が到着。

教室の時計で午後四時前、姫百合郷をバドミントンに誘ったが断られた。二階の第二図書室へ行き、寒桜困夫、湯船想慈を誘った。

美術室前の廊下でバドミントンを開始。

楠木亜里砂、姫百合郷は一度もでてこなかった。やがて殿村教師にみづかり、説教を受けた。

第二図書室に行き、水影星子と短い会話。

美術室に戻り、仮眠をとった。

教室の時計で午後五時半、姫百合郷と下校した。

楠木 亜里砂

ホームルーム終了後、美術室に移動。鍵は既に開いていた。

甘宮杏が来ていた。やがて、姫百合郷が到着。

その後、何度か美術準備室には入った。

しかし数分程度で美術室に戻り、廊下へはでなかった。

姫百合郷はずっといた。

教室の時計で午後四時前、甘宮杏はバドミントンのためいなくなった。戻ってきてからははずっといた。

教室の時計で午後五時半、甘宮杏と姫百合郷が下校した。

午後六時前に下校した。

姫百合郷

ホームルーム終了後、職員室で美術室と美術準備室の鍵を借りた。解錠後、すぐ職員室へ返却した。

美術室に行くと、甘宮杏、楠木亜里砂が来ていた。

来たときと下校時、イーゼルの準備と片付けて美術準備室に入った。

しかし廊下にできることはなかった。

楠木亜里砂は何度か美術準備室に入ったが、数分程度で美術室に戻ってきた。

教室の時計で午後四時前、甘宮杏はバドミントンのためいなくなった。

戻ってきてからははずっといた。

教室の時計で午後五時半、甘宮杏と下校した。

アリバイ

特別教室棟を出入りした生徒八名について、死亡推定時刻のアリバイは以下の通り。

花房 律

水影 星子

南棟で花房が起きたとき午後四時一分だった。

その後、ずっと二人で一緒にいた。

寒桜 困夫

湯船 想慈

午後四時過ぎまでは美術室前でバドミントンをしていた。それからグラウンドで野球を観戦していた。常に二人で行動していた。

甘宮 杏

午後四時過ぎまでは美術室前でバドミントンをしていた。困夫、湯船が一緒だった。

その後、美術室に戻った。楠木、姫百合が一緒だった。

楠木 亜里砂

姫百合 郷

ずっと美術室、もしくは美術準備室にいた。

美術室、美術準備室の外へはでていない。

寒桜 未緒

x

午後四時過ぎに図書室へ来た。

書架の奥にいたため、水影、花房からは姿が見えなかった。

図書室は奥のほう（カウンターと反対側）にも入口がある。

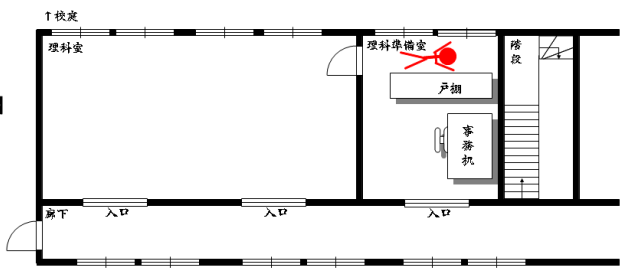
水影、花房に見られることなく廊下へ出ることができた。

了

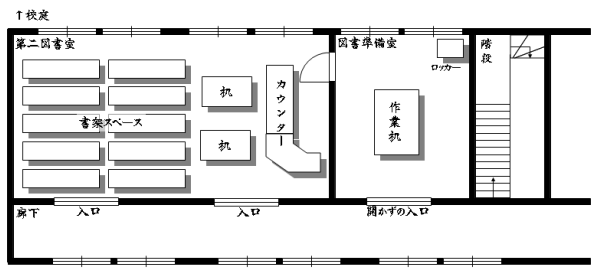
玖乃杜モノクローム 【問題編】各階平面図



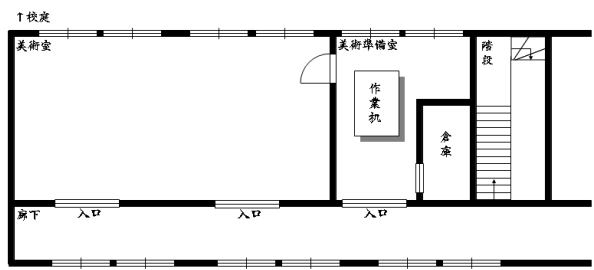
【一階】



【二階】

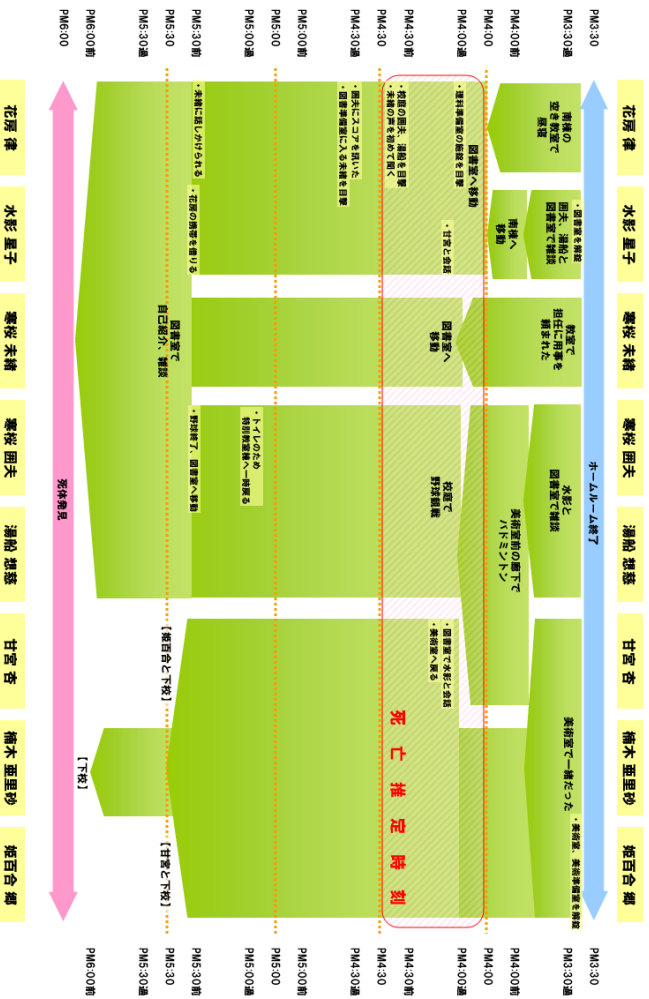


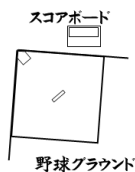
【三階】



玖乃杜毛ノクローム

【問題編】行動表





校庭



特別教室棟

→ 渡り廊下を通して
他の棟へ

玖乃杜モノクローム 《問題編》

著者 小田牧央

平成二十一年五月九日 初版 発行

解答編の応募、公開については、左記URLを参照してください。

the long fish

<http://longfish.cute.coocan.jp/>